

武藤文庫蔵『交隣須知』について

不破 浩 子

On Muto Bunko-Bon "Kōrinshuchi"

Hiroko Fuwa

はじめに

『交隣須知』は、江戸時代末期から明治時代にかけて行われた代表的な朝鮮語学習書である。本書は、対馬通事が編纂したものに雨森芳洲が力を添えて成立したものとされている。明治維新後、それまでの宋氏にかわって直接朝鮮との外交にあたることになった外務省は、朝鮮語学の必要を感じて厳原に語学所を設置し、通事の子弟だけでなく士族も入学させた。そこで、生徒たちは『隣語大方』や『交隣須知』を各自筆写して教科書として使用したという（注1）。本書（以下、『交隣須知』を指す）は、明治一四年刊本が出るまでは写本として伝わっていた。

現存諸本は、増補項目を有するものと、有しないものとの二系統に大別できるが、武藤文庫蔵本（以下、武藤本と略称する）は、増補本系に属し、現存諸本と同じく四巻仕立てで、そのうちの第二巻を欠いている。

形態は、天文・時節・昼夜のように意義分類し、漢語の見出しに対してハングルで例文をあけて、右側に日本語の訳文をつける。訳文としての日本語は、本来完備していたものではなく、部分的につけたあった単語訳が、次第に独立した日本語文としても意味が通るように整備されていったものである（注2）。項目については、諸本との比較検討を行ったことがある（以下前稿と呼ぶ。注3）。

本稿では、武藤本の内容について検討を行い、その資料的価値を探ってみたい。比較検討に用いた諸本は、前稿と同じで、論述に際して、『交隣須知 本文・解題・索引』（京都大学国語国文学研究室）を京大本、『明治一四年版交隣須知本文及び索引』（笠間書院）を明治刊本と略称する。

一 書誌的な特徴

武藤本の現存三冊のうち、巻一は巻三・四に比べて汚損が激しく、表紙の色も巻一は灰色、巻三・四は茶色である。大きさは、巻一は（24・1×15・7^分）、巻三・四は（24・1×16・0^分）で巻一の方がやや小さい。巻一には、朱墨による教簡所の加筆訂正があり、撥音・促音・拗長音といったハングルで合成表記になるような特殊音に対して一音節化して発音すること指示する符号が三八語種（のべ二三七語）に付けられている。この符号は、巻三以降では「すいしやう（巻三金宝）」の一例があるのみである。また、例文はあるがそれに対する見出しを欠いている條が、巻三に三項目、巻四に八項目ある。これは、巻三・四の基ついた写本に汚損があっ

て見出しが読めなかったために起こった欠落と推測され、連続符号についても、巻三・四の基づいた写本には巻一と同じようにつけられていた可能性もある（注4）。

原則として各見出しに、朝鮮語文と日本語文が一つずつ対応させられているが、複数の例文或いは語があげられていることもある。どの箇所にもどのような例文が付け加えられているかは、諸本によって異なる。京大本に一九箇所、明治刊本に四箇所、武藤本には二二箇所の増補があり、京大本は「一本二、ヨクウメサシヤレ（巻一⑤14填）」「又ホンハ、ケンタイニヨキテミレハ、ヒヨフシサヘモソンジカタガスクナイ（巻三⑩9冊）」のように通例の日本語文と同様に文章の形態をなしているものが一二例あるのに対して、武藤本は、「印ト云テニハ過去ノ言、又他人ノ言タル言ニツカウ（巻一⑤17原）」といったハングルについての注や「江邊ハ浦内ノ水邊云（巻一⑥27洲）」「湯 トウト云トキハ熱水也（巻四⑫76湯々）」のように漢字やその発音についての注を加えたり、「又ミチガジルイ（巻一⑤1地）」「又面ヲ云（巻一⑨9丁）」のような別の語義を注したりしている。「ジルイ」という語は、「道路のぬかりを関西にてしるい」と云（『物類称呼』巻五）のように西国の方言である。本書では、武藤本に欠けている巻二に「石ガハラヲシイタニ、シルウナクテ通ノヨウゴザル（明治刊本・巻二磚）」とある。

二 教科書としてみた『交隣須知』の内容

『交隣須知』は、朝鮮外交の必要性から編纂された語学学習書で

あることから、その実用目的に相応した、公的な内容のものであることが想定される。そうした、視点から本書の内容を見てみると、例えば『捷解新語』『隣語大方』では、明らかに外交場面のやりとりが中心であったが、『交隣須知』の場合は、意義分類の辞書形態をとっており、例文の長さが限られていることもあって、外交の実用に直結する例文は見られない。また、通常の教科書の概念基準からすると、どうかと思われるような内容の例文も見られる。「ユグヲヌクトキ、チヨトイヤガルフリテモシテコソカウユイ（巻三⑥5女袴）」「アキラカナ燈ノ下ニ美人ヲ対シテ居タラハ心ガドウゴザラウカ（巻三⑪19明燈）」「ヌスミヲシテ、酒ト女ニ狂ウテ、ジキニコロスヤツシヤ（巻三⑫27偷）」「ダキアウテ、フタリネマセウ（巻四⑫18抱）」のようなものや、「フタヲキセテイテ、イキノデヌヤウニサシヤレイ（巻三⑨13蓋）」「首シメテコロス罪ガ、キル罪ノツギジャ（巻三⑫31絞）」「アタツテ馬ノ下ニヲチタニヨリ死シタニチガイマセヌ（巻三⑫43中）」「クシデツキサイテコロシテモ、ホウラツナ者ハアワレゲガナイ（巻四⑪165串）」のような残酷な例文がある。後者の例文は、見出し語自体が政刑の類を扱う所為でもあるが、前者の類は、分類や採録語彙には、このような例文でなければならぬ必然性は無い。これは、例えば、寛政頃の成立と推測される唐話辞書『東京異詞相雜解』に「郎々仔（イタツラモノ・イロイロモノ）」「色郎者（イロモノ）」「賭銭（バクチウチ）」「買嫖（ケイセイカイ）」「郎女（イロヲナゴ）」といった罵詈言が載せられていることと軌を一にするもので、当時の社交場面の実状を反映するものと考えら

れ、こうしたものを排除しているキリシタンの教科書の方がむしろ特別であるといえよう（注5）。また「アノ人ハ、テヲスル人デタノミニナリマセヌ（巻一⑨51謀）」「アノ人ハ、ドンニゴザル（巻一⑨56鈍）」「アヤツハ、マエヨリスルカシコイ（巻一⑪65彼）」のような人物評価に関する例文も多い。これは、『捷解新語』や『隣語大方』といった他の朝鮮資料とも共通する傾向である。

また、『隣語大方』では、学習効果を高めるため、諺や故事成句が非常に多く採られていたが、本書でも、漢文に典拠をもつ「君子ハ少シノシソシジヲ見ズト申マスル（巻一⑩34君子）」「男ハ、立身揚名以顯父母ト申マスル（巻一⑪17男）」「修人事後ニ待天命ト申マスル（巻一⑬56命）」「邯鄲ノ夢（巻一⑬57夢）」「瞬千里（巻一⑬61瞬）」「コツズイニテツシマシタ（巻一⑬32骨髓）」「大鵬ハ一日二万里ヲユクト云詞ガゴザリマスル（巻一⑮6鵬）」「イツソニワトリノ口ニナルト云テモ、牛ノシリエニナルナ（巻一⑮46喙）」「アヲノイテツバヲハケバ、ワガカヲニヲチル（巻四①16仰）」「トガメラレテモ過ヲ改ムレバヤカマシウナイ（巻四⑦7過）」のような成句や、俗間によく行われたことが確認できる「朝ヤケハ雨、タヤケハ晴レル（巻一①50霞）」「鳥ナキ島ノカウモリ（巻一⑮5蝙蝠）」「マナイタニアガツタ魚ガ、キレモノヲソリヤウカ（巻三⑨15組）」「チャウジガシラガヨイニヨリ、キハメテヨイコトガコサリマセウ（巻三⑪18燈花）」「ヲドケガマコトニナリマシタ（巻四⑤5弄談）」、中国や朝鮮で行われていた俗諺と推測される「ダンナノセンタクスレバ、アシノキビスガ白クナルト申マスル（巻一⑬34跟）」「キナイノメキ

ジ（巻一⑮27雉）」「シラサギヨ、ハラタテタ鷹ガ白イ色ヲネタム（巻一⑮19白鷺）」「カサ、ギガ啼ニヨリ、コトガゴザリマセウ（巻一⑮59鵲）」「カナボンハワレテモ、モトガネハツカウ（巻三⑧33鐙盆）」「サホノサキデモ三年ハコタヘルト云ニヨリコラヘサシヤレイ（巻三⑪35竿）」のようなものもある。

例文の特徴として固有名詞が少なく、場面に具体性が欠ける傾向が見られる。それは、「ヲ、ソレハタクミナ（巻四①66巧）」「イカニモミヤウナ（巻四①67妙）」「ヒキイダシテ見イ（巻三⑭19曳）」「ヒトク、リヲ出シテカケテ見ヨ（巻三⑮32一結）」「チギツテワシニ下サレイ（巻四②9摘）」「ホリテキテヤワラカニユデイ（巻四②10掘）」のような短い例文に多く見られる。固有名詞は、日本のものよりも中国・朝鮮のものに偏っている。日本の地名は「江戸辺」「ツシマノ山」「日本」の三例であるが、朝鮮の地名は「京畿」「南京」「北京」「上道」「下道」「朝鮮」「釜山」等がある。さらに、風俗の面でも、官職名は主として「觀察使」「県監」「権官」「御使」「僉使」「参判」「守庁」「守令」「使令」「水軍節度使」「兵馬節度使」「内医」「府尹」「方伯」「別軍職」「別将」のように朝鮮李朝のものであり、「印判」「交代」「褒貶」のような政治制度に関する語や、「紗帽」「直領」といった官服、「紅箭門」「大門」「クツロ」といった建築関係の語や、「独脚」のようなお化け、「奠雁」のような婚姻風習、「パッチ」「テクリ」「ビンゴリ」「幸定」「太平簫」等の服飾・調度、「五花糖」のような食品にいたるまで、朝鮮のものが中心である。それをどのような形で日本語文に取り入れるかという点で、諸問

に相違が見られる。即ち、「官員」「道士」等を漢字語のまま受け入れるか、日本の「地頭」「山伏」といったものに入れ替えるか、「使令」を「シレイ」という漢語として受け入れるか、朝鮮漢字音の「サレダ」で受け入れるかといった翻訳態度の違いである。例文に日本の固有名詞を含むことから、対訳は日本人によるもので、朝鮮語的な性格をもちつつ成長していったといわれる(注6)。

例文の形式は、「三月月ヲビゲツトハ申マスル(巻一①18微月)」「雪ヲ六花ト云イマスル(巻一①45六花)」といった「AヲBト云ウ」形式や、「アマト云モノハ、女ノ僧シヤ(巻一⑨30尼)」「カシラクギハ、アタマノアルクギシヤ(巻三⑩37頭釘)」等の「AハBデアル」形式の標準的な例文の他に、目立つものとして、「ホヲヲロセ(巻一⑧15下蓬)」「バ、ヲヨベ(巻一⑨42媼)」「アノボウズトラヘテ耳ヲモメ(巻一⑨29僧)」「ワレハサキニタツテユケ(巻一⑩50汝)」のような命令文が多い。その他、「ホサヲミサシヤレタカ(巻一⑨16媼)」「ヲチガヲ、ゼイゴザルカ(巻一⑩10叔父)」のような疑問文もある。「皮肉ト申ハ、文字ハ用マスレドモ、人ニカワト云詞ハ申マセヌ(巻一⑬5皮)」「声ハ天下同ジコトナレドモ、声デ云コトハミナチガウテフシギニコサル(巻一⑬64音)」「着ノ字ハ、キタトモ云イ、カフツタトモ云イ、ツイタトモ云ウ(巻三⑥20着)」「コトバヲノベテユク於ノ字デゴザル(巻四⑥72於)」「コトバヲツグ而ノ字シヤ(巻四⑥73而)」のように漢字の用法に関する例文や、「印ト云テニハ過去ノ言、又他人ノ言タル言ニツカウ(巻一⑤17原)」「又谷古トモ云(巻一⑤35谷)」のようにハングルの用法に関する例文

もある。

なお、武藤本には、諸本には無い例文と項目の齟齬が見られる。「潮ハカライ(巻一⑥39江水)」は、明治刊本では「江ノ水ハカラクアリマセヌ」とあり、本来は潮水は辛い江水は辛くないという対比をなすもので、「江水」に言及しなければ「江水」の例文にはならない。これは、例文の一部が脱落したものと推測される。「声ハ天下同ジコトナレドモ、声デ云コトハミナチガウテフシギニコサル(巻一⑬64音)」も、このままでは「音」の例文として適当ではなく文意も通らないが、明治刊本では「声ハ天下皆同ジケレドモ、音デ云フ言ハ違テフシギニコザル」のように、「声」と「音」の対比をなす文になっている。これは、「音」と「声」の誤写と考えられる。また、誤りではないが、武藤本の例文が他の本より日本語的に意識されているために、朝鮮語の見出しに即応していないものもある。「盆石ニ木ヲウエイ(巻一⑤33恠石)」の「恠石」は庭石になるような偉恠な石であり、見出しの「花草」は「後園」「東山」「花木」と同類で「ソノ」「ニハ」と訳し得る語であるが、武藤本には「庭ヲ見サシヤレイ(巻一⑤34花草)」とあり、明治刊本には「花草ヲ見ラレヨ」となっている(注7)。

三 表記

『交隣須知』には、漢字に存在しない字形や漢字として特殊な意味用法の文字が見られる。前者の例として、「鐙」字は金属製の酒器を表し、「櫛房ヤグラ」「櫛タナ」の「櫛」字は木製のタンス類を表

している。「注乙（巻一⑧10）」は繩をいう「ス邑」の音借表記で、「𦵏」という合字も行われた。これらは、朝鮮国字といえる。後者の例としては、「甥」の漢字としての字義は「喃語」の「喃」で擬声語であるが、「甥」を「夫ノ兄弟」、「妻甥」を「女房ノ兄弟」としている。「𦵏」も漢字の字義は「烟窓」であるが、「クツロ（＝オンドル）」に用いており、「𦵏」は漢字の字義は「鞍飾」であるが、「障泥^{アオリ}」に用いている。「傀儡」は漢語としては人形芝居であるが、「キョウゲン」に用いている。これらは、朝鮮語的な用法である。

本書の表記は、ハングル本文に漢語漢字表記をまじえ、漢字まじりの片仮名日本語文を対応させ、所々ハングル本文の横に漢字で対訳をつけている。概して、日本語文にまじえられた漢語は日本語の中に定着したもので、ハングルにまじえられたものと対訳されたものは、日本語としては見慣れないものが多い。

朝鮮では、本書のような語学書や医学・農学等の実用書及び漢籍の諺解類や啓蒙的道徳書・初学教科書といった限られた用途以外では二〇世紀初期までハングルは用いられず、正規の表記手段は漢字漢文であった。また、ハングル文献に漢字を使用することはまれで、漢語も通常ハングルで表記された。武藤本でハングル本文中にまじえられている漢語は、次の五六例である。（一）内に対応する日本語文中の語を記す。

左道（上ミ） 右道（下モ） 平安（平安）
多幸（タコウ） 宴享（イハチ） 享

東夷北狄南蛮西戎 後園（コウエン） 根源（コンポン）
失足（フミソコナイ） 波汀（ナミウチギワ）
江邊（エノヘン） 雄壯（ヨビタダシウ）
海邊（カイヘン） 百姓（ヒヤクシヨウ）
員（地頭） 壮丁（タツシヤナ） 道德（道德）
天下（天下） 棋獐（棋獐） 神仙（仙人）
蓬萊山（蓬萊山） 仁道（仁道） 行（ヨコノウ）
公（其元様） 仔細（クワシウ） 每事（バンジ）
一国之王（イツコクノ王） 臣下（シンカ）
一国政事（一国政事） 各邑（諸方） 守令（地頭）
一道王（一道王） 兵馬節度使（節度使）
僉節制使（僉節制使） 郡守縣監（郡守縣監）
不知其数（ヨケニ） 公（ゴジブン）
一代官（一代官） 主掌（主掌） 京都（ミヤコ）
国書（国書） 不見小過（少シノシソソシヲ見ズ）
近侍（チカクツカヘル） 猶同叔姪（叔姪ノゴトキ）
兄弟 三綱中（サンコウノ中ニ） 行実（行）
嫁年（ヨメイリドシ） 有信（マコトヲ以テ）
藥子（ゲツシ） 妾（テカケ）
改過（アヤマチヲアラタムル） 京畿（キナイ）
南京（ナンキン） 下馬炮（ゲバノテツボウ）
上馬炮（ノルトキノテツボウ）

また、ハングル本文の横に対訳としてつけられた漢語は、次の一

一七種一二〇例である。

微月(ビゲツ) 銀河水(アマノ河) 不祥(キノドク)
 東風(コチ風) 傷(ソンジ) 漂風(ヒヤウリウ)
 連(ツツイテ) 海邊(カイヘン) 滋味(ヲモシロフ)
 惘忙(ナンギニ) 白遮(シロイ天幕) 草木(草木)
 秋収(トリヲサメ) 穀食(コクモツ) 支離(ツツク)
 對馬州山(ツシマノ山)
 朝霞雨暮霞晴(朝ヤケハ雨タヤケハ晴)
 揺乱(ウタヘサワグ) 果然(誠ニ) 奇特(キドクニ)
 後(カラ) 雨裝(雨具) 兩主(夫婦)
 破運七星也(七星ハ運数ヲ守ルト云マスル)
 颯々(サツサツト) 奇運(メデタイ氣)
 柴炭(スミシバ) 無限(カギリノウ) 時節(耕作)
 回復(タテナヲシタラバ) 喧和(ノドカニ)
 上元(十五日) 崇尚(ハヤリ) 德説(イワイヲスル)
 山所(墓所) 緣故(サシツカエ)
 思郷之心(古郷ヲ思心) 平明(未明) 威氣(風邪)
 大段(甚シウ) 待接(ゴチソウ)
 感謝(カタジケノウ) 出入(出入) 英敏(キドクニ)
 効則(習ハレ) 無可奈何(シカタナイコト)
 国忌(コクキ) 終始(ツイニ)
 完定(キワマリマシタ) 移所(家移リ)
 閑暇(ヒマナ) 慶宴(ヨロコビノエン)

發程(ホツソク) 有德(仕合ノヨイ)
 德談(イハイモシ) 客懷(旅ノ思) 尖(トガル)
 視(ノゾイテ) 掩(ヲヲウテ) 日覆(ヒヲイ)
 山獵(カリ) 異常(フシギニ) 險(ケワシイ)
 切迫(ナンギデ) 大綱(大方ハ) 洶湧(アライ)
 人事(レイギ) 恭敬(ウヤマイ) 軍士(人夫)
 者(人) 使令(サレダ) 夫(ヤモメ)
 慈味(ヲモシロイ) 浦作漢(アマドモ)
 慧逸(ハツメイナ) 德沢(ヨシタク)
 汎濫(イカツガマシイ) 迷惑(タワイナシ)
 瘡疾(ヲコリ) 倨慢(ヲヲヘイニ) 室内(ナイギ)
 親父(親) 貴(第シナ) 時方(タダ今)
 父母(父母) 膝下(ヒザモトニ) 門戸(家筋)
 奠(ソナエル) 書房(ヲツト) 從(ケライ)
 無狀(アヤシウテ) 成婚(コンイン) 甲(年)
 疔腫(ヒヤウソウ) 桃花骨(クルブシノホネ)
 診脈(ミヤクヲ見テ) 環子(耳ガネ)
 不用(無用) 舌盒(タバコイレバコ)
 書契色(カキテ) 釜山僉使(フサン)
 菓実(クダモノ) 製御(コキマワス)
 始作(ハジメイ) 淒涼(サビシイ) 祭享(マツリ)
 路里馬(カゴ) 故人(エビスドモ)
 愁心(キニカカルコト) 出場(ケツダン)

甲（ムカシ） 移安（ヨウツシ申テ）

奉安（安置ニナリ） 牧場（マキ） 面稟（ジキニ）

竿々（ラクラクシテ）

これは、ハングルで表記された漢語の意味を明らかにするために横に漢字表記をつけたものであるが、明治刊本では、約一〇〇〇語もの対訳漢語がつけられており、武藤本に比べて漢語を注する度合いが非常に高い。

朝鮮語には多くの漢語が入っているが、その中には、中国起源のもの、朝鮮製のもの、日本製のものがある。日本で作られて朝鮮語に取り入れられた漢語は、近代化・西洋化の過程で新しい事物概念を表すために作られたものが多い（注8）。本書の日本語文の表記を大別すると、漢字表記、片仮名表記、漢字片仮名混用表記の三種類があるが、諸本によってどの程度漢字を取り入れるかは異なっている。「表Ⅰ」は漢語の表記を漢字・漢字片仮名混用・片仮名表記の三種に分けてその割合を示したものである。これによると、明治刊本は漢語を漢字で表記する方針であるが、武藤本・京大本は、見出し漢語も日本語文の中では片仮名表記する傾向があり、片仮名表記率が高い。一語の中に漢字片仮名をまじえる表記は、諸本とも少なく、次のように、よく使われる一部の漢字を漢字表記としてまじえるか、或いは、捨て仮名・送り仮名を仮名表記するかの場合に限られている。

ヒヤウ風 ホウキ星 ロウ月 チャウ人 シヨク人
第シ（大事） 一スン ガク人 一ツシヨ

【表Ⅰ】漢字・漢字片仮名混用・片仮名表記

漢語

	武藤本			明治本			京大本		
	漢字	混用	片仮名	漢字	混用	片仮名	漢字	混用	片仮名
I	28.7	2.6	68.7	81.5	1.0	17.5	47.6	0.5	51.9
Ⅲ	21.9	0.7	77.3	77.6	3.1	19.3	18.1	1.1	80.8
Ⅳ	14.4	0.5	85.1	84.8	1.4	13.8	11.6	1.6	86.8

和語

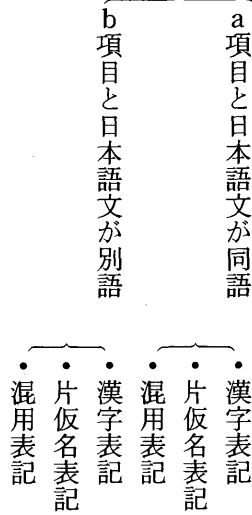
	武藤本			明治本			京大本		
	漢字	混用	片仮名	漢字	混用	片仮名	漢字	混用	片仮名
I	29.1	19.0	51.9	33.3	14.3	52.4	11.5	3.3	85.2
Ⅲ	18.5	13.6	67.9	28.4	19.4	52.3	2.5	2.5	94.9
Ⅳ	6.4	4.1	42.4	37.8	8.5	53.7	2.2	3.3	94.5

見出し語として採られている語の表記と日本語文の表記は、一致する場合と一致しない場合とがあり、一致しない場合には、日本語文の方が片仮名表記になっているもの、即ち用字の違いと、全く別

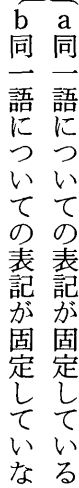
語になっているものとがある。複数出現する語については、表記が固定しているものと固定していないものがある。表記が固定していない場合として、仮名遣いの違いと用字の違いに分けられる。以上のような表記の問題点を整理すると次のようになる。

○『交隣須知』の漢語の表記

イ 項目と日本語文の表記



ロ 複数出現する語の表記



イについては、前稿で述べたので、ロについて次に具体例をあげる。

a 仮名遣いの違い

カゲホシ・カゲホウシ	カンヤウ・カンヨウ (肝要)
キビ・キミ (気味)	キメウ・キミヤウ (奇妙)
クロウ・クラウ (苦勞)	コウクワイ・カウクワイ (後悔)
ゴチソウ・ゴチサウ (御馳走)	
サウカバ・サウカマ (雙駕馬)	

ザウタン・サウダン (雑談)	シアン・シヤン (思案)
シセン・シゼン (自然)	ジャウ・シヤウ (錠)
ジャウブ・ヂヤウブ・ヂヤウフ (丈夫)	
ソウジテ・サウジテ (総)	ソンジ・ソンシ・ゾンジ (存)
タンノウ・タンナウ (堪能)	チャウド・チャウト (丁度)
ヒツヂヤウ・ヒツジャウ (必定)	
フシギ・フシキ (不思議)	ヘイセイ・ヘイゼイ (平生)
ヤウス・ヨウス (様子)	ヤウジン・ヨウジン (用心)
リカウ・リコン (利口)	リヤウケン・リョウケン (了簡)

b 用字の違い

イギ・威儀	イチド・一度	イツシヨ・一ツシヨ・一所
一本・一ツ本	ヨヲ・王	ヨヲゼイ・大勢
ヨンモン・諺文	カイ・害	カイヘン・海邊
コウ・香	カウセキ・行跡	ガク・楽
カンシヨク・寒食	キン・鬼神	キヤク・客
キヨス・虚	キン・金	ギン・銀
ギンミ・吟味	クヤク・公役	コウテイ・皇帝
クワシ・菓子	クン・君	ケイセイ・傾城
ケウ・今日	ケライ・下来	ケンブツ・見物
コウ・功	コクヨヲ・国王	コンイン・婚姻
コンボン・根本	サイシヤウ・宰相	サウホウ・雙方
サタ・沙汰	サツソク・早速	シヤワセ・仕合
ジセツ・時節	シヤ・紗	ジャウ・シヤウ・錠

シヤウチウ・焼酒 手セキ・手跡 シヨクモツ・食物
 シンドウ・震動 セイ・姓 セイ・勢
 セイシユ・清酒 セイシン・精神 ゼン・膳
 センジャウ・戦場 ゼンゼン・漸々 ソンズ・損
 ソンジ・ソンシ・ゾンジ・存シ タ・他
 ダイイチ・第一 第ジ・大事 チエ・智恵
 チャウド・チャウト・丁度 テツ・鉄 テホン・手本
 テンキ・天気 ホウ・方 ホウ・法 ボシ・帽子
 ボウタン・冒綴 ハトウ・波濤 ハツメイ・発明
 ヒツヂヤウ・ヒツジャウ・必定 ヒヤクシヨウ・百姓
 フボ・父母 ブンスウ・分数 フンミヤウ・分明
 ヘイ・兵 ヘン・辺 ヘンツウ・変通 ホン・本
 都・京 メイワク・迷惑 ヤウジン・ヨウジン・用心
 ヨクシン・慾心 リヤウケン・リヨウケン・了簡
 レキレキ・歴々・暦々

四 語彙

前述の朝鮮漢語のうち、中国起源の漢語には、学問世界において取り入れられた古典中国語の他に、唐代以降の俗語や元・明の近代中国語もある。「冊(本)」「江(川)」「飯饌(メシノサイ)」「同生(弟妹)」「三寸(叔父)」「四寸(イトコ)」等は、本書にも見出し語として見え、「安酒(酒ノサカナ)」「工夫(ケイコ)」「生覚(思ヒ)」「対接(モテナシ)」「仰託(タノム)」「議論(相談)」「懃心(コ

コロツカイ)」「念慮(キツカイ)」「辞讓(ジキスル)」等は対訳の中に見える。「灰ガ立ツニヨリ門タテイ(巻一⑤23灰)」の「門」が他の本で「戸」になっているのも「門」が「扉」の意味で用いられたためと考えられる。同じ朝鮮語に対して、諸本間で異なる語があらわれている場合があるが、次に漢語(和製漢語・朝鮮漢語を含む)・和語という観点から四種の場合にわけて、例をあげる。(一)内に他の本の語を注する。なお、シャチ、テクリ等の朝鮮語は除く。

イ 武藤本と他の本とで異なる漢語である。
 悪鬼(悪魔) 安置(奉安) イギ(威厳)
 イシヤ(医員) 一昨夜(昨夜・サクユフ)
 インギンニ(恭順ニ) 韻字(韻)
 インセキ(印判) イントク(恩徳)
 インバン(図書) エシ(画工) エンイン(遷延)
 王(王上・コクヲヲ) 大シウライ(ラツバ)
 カウサン(屈服・降服) カウセキ(行作)
 カクベツ(特別) ガクモン(文)
 気(氣運・氣象) キカウ(氣運)
 キジャウナ(慷慨ノ) キセイ(精誠・シンジツ)
 キナイ(京畿) キブン(氣・氣運・キシヨク・氣性)
 キヤウニ(敏捷ニ) 及第(科擧)
 キリヤウ(リコフ) キンシウ(近侍)
 ギンミ(糾問・センギ) 軍卒(軍士)
 軍夫(軍士・グンヒョフ) 軍民(百姓)

ケイコ(工夫) ゲイ(才) 下知(号令)
 ケツシヨ(没収) ケツタン(処決・決末)
 ケンシキ(権・ケンペイ)
 ケンヤク(儉朴・シツバク) 公儀(官家)
 耕作(時節・サク) 孝道(孝養)
 コクシン(九分字) 古注(古法)
 コンボン(根源) 細工(シゴト) サウガ(雅淡)
 サレダ(使令) ジキ(辞讓) ジシヤク(定南針)
 時節(将帥・タイシヨ) シダラクニ(ザツニ)
 シヤ(シヤク) 十二絃(加耶琴) 寿傑(寿骨)
 手セキ(字) シヨクモツ(飲食) 諸道具(器械)
 諸方(各邑) 神仙(仙人) 人品(性稟)
 新米(新物) セイジヨ(シンジ) 節度使(觀察使)
 戦場(軍中) ソンジ(害シ) 宰相(政丞)
 サウリヤウ(長男) シヤウシ(フビン)
 シヨジ(万事) 庶人(輕輩) スイスル(斟酌)
 青松(長松) 訴状(出訴) 代銀(賞)
 第ジ(タイセツ) 大廳(キヤクザ) タンカン(目錄)
 短命(夭死) チクシヤウ(獸)
 地頭(地方官・守令・官員) 丁度(第二)
 チョウホウ(カンヨウ) チンチャウ(奇特・ケツコフ)
 テキシン(テキコク) テンシ(篆書)
 天目(ナラ茶碗) ドウザ(二坐)

同前(一同・ヤウ) トツコ(フウリン・ドラ)
 内心(心中) ナンギ(迷惑・切迫) 農作(農事)
 拝礼(肅拜) ハクガ(博字) ハクロク(岩緑青)
 ハツメイ(聰慧・リコフ) バンシ(毎事)
 ハンジャウ(満堂) 風水(トチ)
 フシギ(奇怪・異怪) フシン(不思議・ウサン)
 分数(ブンリヨ) ブチヨウホウ(庸劣)
 ブンゲン(富貴) 分明(分名) 平安(安寧)
 ボウハ(妄語) ホウビ(賞賜) ホツソク(発程)
 ホン(書) マイマイ(フダン) ミツミツ(秘密)
 未明(平明) 無用(不用) メイワク(ナンギ)
 モンモヲ(未練) ヨウジヤウ(調理)
 ヤウス(形状・ギョウサ・模様・様) ヨクシン(慾)
 リカウ(敏捷) レイギ(人事)
 レキレキ(貴人・夫人・守令)
 レンケツ(清廉・正廉) ロウ(獄)
 ワダン(和睦・和親) ヨントク(徳沢)
 武藤本で漢語であり、他の本では和語である。
 a 和語
 イケンスル(誠メタ) イチドニ(トモニ)
 イツバイ(ヨケイニ) エンナウ(ヨントリ)
 エンリヨガマシイ(謙ル) 往来シテ(カヨフ)
 ガク(ナリモノ) 果子(クダモノ)

ガテンノユカヌ(ワカリマセヌ)
 カンアクナ(カダマシイ) キウニ(早く・速ニ)
 キドクニ(スグレ・尤ナコト)
 キミノヨウテ(サツバリココチヨウ)
 ギヤウ(シワザ) キヨシ(ウソ)
 キヨジヤク(身ガ弱ヒ・ムマレツキヨワイ)
 ギンミシテ(タダシテ) ケツカウナ(メデタイ)
 ゲンジウナ(キビシイ) ケンソナ(陰シキ)
 コウシヤナ(スグレタ) 後(スギ)
 香氣(カウバシイ) 胡筋(シバブエ)
 ゴキヨヤウ(ヲキキイレ) ゴジブン(アナタ)
 ゴチソウ(モテナシ) サイ(ツマ)
 サイシヨ(始メ) ザイモク(マルタ)
 ザンジ(暫ラク) シゼント(ヒタスラ・オノズト)
 シット(妬コト) シユ(人)
 ジユウ(ココロマカセニ) 酒宴(酒盛り)
 ジュクスル(デキル・ナレル) 簫(ヨコブエ)
 情(ナサケ) シヤウノ(ヨイ)
 商人(アキウド・バイ人)
 ジヤウブ(タシカニ・キツウヨフ)
 シヤウユ(アマ味噌・ミソ) シヨクモツ(クイモノ)
 シンドウ(フルエバ) シンヤウ(信ト)
 スイビシ(スサビ)

セイダス(ツトムル・ネンゴロニス)
 セウシテ(マネイテ) ゼヒ(必・ムリヲシニ)
 ソウジテ(スベテ) ソウタイ(スベテ・サマザマ)
 ソウレイ(ホウムリ) サウヨウ(カナリ)
 ソンジ(イタミ) タイコ(ツツミ)
 チャウ人(マチノモノ) チンチャウ(ヨロコバシウ)
 天幕(日サイテ・日オヒ) ドウシ(ヤマブシ)
 ドウゼンニ(トモニ) 当年(今年)
 トウリウシテ(トマツテ) ドウリ(ゴモツトモ)
 トツカブ(ヲニ) ナイギ(才妻) 習テ(效則)
 ナンギヲシテ(困デ)
 バカラシウ(ヲロカナコト・ヲロカシウ・コシヌケ)
 必定(極テ・必) フキツナ(アシキ) ブク(喪)
 フシギ(アヤシイ) ブシヤウデ(倦デ)
 不通シテ(ヨセツケズ)
 ヘンジ(カハリ・チガヘル) ホウジ(報イ)
 ホツソク(オワカレ) ホウラツニ(恣ニ)
 メイワク(キゼキ) モンシ(カラカミ)
 ヤク(ツトメ) 勇氣ガゴザル(イサマシイ)
 ヨウ(ツカイドコロ) ヨウイセイ(コシラエヨ)
 用心シテ(ツツシンデ) ヤウス(色)
 ヨノ(ホカノ) ラク(ユルヤカ)
 歴々(ヤクメヲツトムルヒトタチ・年寄)

ロクニ(ヨク)

b 訓読語的なもの

悦服(ヨロコビフクス)

強項ノ令(強ヒ人)

水中ニ(水ノナカニ)

サウカバ(ナランダ馬)

道中シテ(道ヲ往テ)

ハクシヤウ(罪ニ服シタ)

武藤本で和語であり、他の本では漢語である。

a 和語

アカシ(真紅)

アカルウ(明朗ニ)

アキラカニ(清明ニ)

アヤシウテ(無状ナ・ワルイ)

アワビノタマ(真珠)

イキヲイ(ギ)

イソガシウ(奔走イタシ)

云ツケ(号令)

家筋(門閥)

イマシメ(禁シ)

イワイノ(吉慶ノ)

ウハギ(道袍)

カキツケ(印鑑)

カタビラ(半著)

カナリデ(サウオウニ)

代リ(交代)

カンガヘ(コウシヤク)

キノドク(フビン)

キハメテ(必竟)

キヨツケテ(用心テ)

クイモノ(食物)

ケケシウ(氣随)

子(子息)

心入(情意)

子供(嫡子)

サイワイ(福)

サイワイニ(僥倖デ)

サカモリ(饗応)

サバキ(処分・処置)

仕合(多幸)

シカタ(動靜)

コト(ギ)

下タ書(草書)

品物(物品)

シバラク(先刻)

シメセ(回示セヨ)

シモジモ(輕輩・下人ドモ)

シワクシテ(吝嗇ニシテ)

スキアイ(生涯)

スルカシコイ(リコウナ)

スワツテ(坐シテ・安坐)

セメツケルコト(論駁)

セウ(周旋・設力)

ソソウニ(無情ニ・フシヨフラシウ)

ソムイタ(謀反)

ソラゴトニスル(失期スル)

タカヒク(尊卑)

タシカデ(丈夫ニ)

玉(真珠)

タマ(彈丸)

タマリ(醬油)

タワムレ(雑談)

チガイ(相違)

ツイエ(入費)

ツカイモノ(礼物・シンモツ)

ツバサ(道具)

ドウヤラ(依然ト)

トガ人(罪人)

トリヲコナイ(施行)

トリヲサメ(秋収)

トリシマラズ(迂闊ニ)

ナガイキ(長寿)

ナガサレ(配所ニヤラレ)

ナグサメ(慰勞)

ナゲカシウテ(嘆息シテ)

ナレサセイ(熟セイ)

ニクイヤツ(フラチ)

西館(官家)

庭(花草)

盗人(賊)

ヌスミ(盜賊)

ネンゴロニ(懇切ニ・一々)

ノツタ(漂流シタ)

ハツカシイ(廉恥ガナイ)

早ウ(急ニ)

ヒキイレ(誘引シ)

ヒク(タンジル)

ヒタノアルキモノ(直領)

ヒト(他・百姓)

ヒノ雨(ヒヤウ)

ヒマ(閑暇)

日ヲクラシ(消日シ)

フシヤワセデ(窮シテ)

フセギ(防戦)

フレ(頒布)

ヘリクダツテ(謙遜)

ホウキ星(彗星)

ホトギ(ビヤクシ・ヒヨフシギ)

マコト(有信・信義)

マツリ(祭祀) 耳ガネ(環子) フ風(逆風)

ムサボルコト(貪心) ムマレツキ(性質)

申上マシタ(奏上シタ) 申ツカワシタ(報ジタ)

尤デゴザル(都合スル) モノ(ギ)

ヤクタイモナウ(愚濫ニシテ) ヤクニタタヌ(無用ノ)

ユイイレ(結納) ユルヤカニ(ラクニ)

ヨイ(リツバナ) 夜服(衣服) ヨシアシ(是非)

ヨロコビノエン(慶宴) 万ノ草(百草)

若衆(少年) ヲゴリヲスル(繁華ナ) ヲドケ(雑談)

ヲヲセツケラレ(傳教・分付) ヲヲヘイニ(倨慢)

ヲヲヨウニ(乱雑ニ) ヲフレ(布告) 女(女中)

女ノ下来(婢)

b 和語が訓読語的・説明的なもの

アツイ心(厚誼) スクイノ兵(援兵)

ソナエル鴈(奠鴈) タカイ官(高官)

タダシウカクコト(正書) 罪ノシダイ(罪状)

トワイ処(遠処) トウミチ(遠路)

トリツギコトバ(通弁) ニドヨメイリ(再縁)

ハカリカイシヤウ(謀害セウ) ヒツジノ血(牛酪)

ヒノデルヤウニ(火急ニ) 本カズ(冊数)

マコトノ情(真情) 惑ヲ解キ(解惑シ)

ヨイシンカ(功臣・賢臣下) ヨウカク手跡(能書)

二 武藤本と他の本とで異なる和語である

アイシラエ(トリモツ) アイマシテ(マミエテ)

アガリ(ノボリ) アザムカ(ダマサレ)

アジヲウ(ノム) アソビ(ナグサミ)

アタタカニ(ヌクフ) アタマ(ツモリ・カミ)

アツイ(アタタカナ) アツバレデ(スグレ)

アト(ノチ) 穴アケル(エル) アノ(彼)

アノ者(アイツ) アマイ(スズシテ)

アマリ(甚ダ・コトノホカ・キツフ)

アマリノ(ノコリノ) アメガタ(アメ)

アヤツ(アイツ・カレ・アノモノ)

アラウテ(フトウテ) アラタニ(更ニ) アル(ヨル)

アルク(アユム) アレ(己レ)

アワレゲガナイ(カワヒソウニハゴザラヌ)

アヲノイテ(仰ギミテ)

イカウ(キツウ・ヒドウ・モツトモ)

イカニモ(マコトニ) イキニ(ウチニ)

イクサ(タタカヒ) イクサコトバ(アヒ言)

イシキ(シリ) イソガシウ(カケマワリ)

イツソ(ムシロ) 糸(糸クズ・イトスシ)

家移リ(ワタマシ) イヨイヨ(ナヲナヲ)

イレイ(サセ) イレ(モリ)

イロイロ(アマタ・ヨケイ・スベテ)

ウケタマワリ(キイテ) ウゴキマワツテ(ウゴイテ)
 ウスイ(スクナイ) 内(ナカ) ウチヤケル(ソソグ)
 ウツ(ナゲル) ウツタエル(ツゲル)
 ウツワモノ(ウツワ) ウデ(ヒジ)
 ウデアテ(ユゴテ) ウデガネ(タマキ)
 ウハギ(ハヨリ) 浦人(浦住ノ者)
 ウレシガル(ヨロコブ) ウレエ(恵ヒ)
 ウロタヘマワリ(ウロタエ) エ(モトメ)
 エグル(トホス・アナアケル) 負(カルウ)
 大キナ(フトイ) 落タ(フル) カエ(クワセイ)
 カキテ(カキヤク) カクシテ(タシナンデ)
 カケイ(ツケイ) カケエ(カケモノ)
 カケヤブツテ(ウチヤブツテ) カケレ(ムスベ)
 カザツテ(ツクロウテ) カサナリ(重ウ)
 カサネテ(再ビ・カヘスガヘスモ)
 カザリグラ(ノリグラ) カシラクギ(オリ釘)
 カズカズ(色々) カタウ(タシカニ) ガタウ(ニクウ)
 カタゲテ(カツイデ) カタチモナイ(トツゲモナイ)
 カタツラツラニ(カタカタニ) カツテ(クリヤ)
 カナシム(ナゲク) 必ズ(常ニ) カネテ(アラカシメ)
 カハル(チガウ) カボウ(オホフ)
 カマヲウ(サシツカヨウ) 通(アルク)
 カラ(ニヨリ) カラウス(ヒキウス)

カラスキ(オホスキ) カリソメニ(フト)
 川(水) カワイラシウ(シホラシウ)
 カワク(コガス) カンガエイ(ワキマヘヨ)
 キエ(ヲチイリ・ヲチ) キコエマセヌ(アシウゴザル)
 キセ(カブスレ) キタコチ(キタゴチカゼ)
 キツウ(ムツカシウ・甚ダ・イコフ・ヒドク・大二)
 キヅカヒ(心ヅカヒ) キニカカル(心苦)
 キミノヨウテ(サツバリココチヨウ) キヤツ(カレ)
 キリサウメン(キザミメン) キワメテ(キツト)
 キンカンアタマ(ハゲアタマ) ククレ(クレイ)
 ククツテ(ムスンデ) 草キリ(押キリ)
 クサレ(朽チ) クタビレ(ツカレ)
 クダル(ヨリル) ログスリ(火薬)
 クハダテテ(タクンデ) クヤシテ(クヅシテ)
 クル(オ出ナサル・デテゴザリ) 狂ウ(マヨウ)
 クレテ(ヤツテ) クレテユク(カタムイタ)
 クロウシテ(ウスグラウシテ) クワセ(カエイ)
 クンデ(イレテ) ゲタ(アシダ) 子(ワランベ)
 コクチヨウ(キミガヨフ) コウタ(ウタ) 声(音)
 ココモト(ココ) 心ガヤスカリ(ヲキノドク)
 心無(ココロヨカラズ) コサイデ(スイテ)
 コシヌケ(拙キモノ) コシラエイ(タケ)
 コシラヘ(ツクツテ・オコシ)

コタヘガトヲ(タヘエマセヌ) コチ(ヲレ)
 コトワケ(コトワルコト) コナタ(ソナタ)
 コノアイダ(近比) コノホド(コノゴロ)
 コボレテ(ヲレテ) コボレル(溢ルル)
 コマカニ(セリ付テ) ゴミ(ホコリ)
 コムツカシウ(メンドウニ・ムツカシフ) コヤツ(コレ)
 コラエ(タヘ・シノビエズ) コリ(ハコ)
 サイタ(ヒライタ) ザクザクシマスル(ムラニナリマス)
 サグツテ(サガシテ) サシツカエ(ワケ・ツカエ)
 サシデテ(サシコエテ) サダメル(正ス・キハメル)
 サハガシウ(ヤカマシウ) サルコロ(サキコロ)
 シカエテ(ハカツテ) シカメサシヤレテ(ヒソマシヤル)
 シカンデ(シボンデ) シキナラベル(シキモフケタ)
 シタジ(汁) シヅカニ(ユルリト・ジツト・ソロリト)
 ジツト(静ニ) シニクキ(難ウ) シバツテ(ククツテ)
 シメツタ(ジクジクスル) 下々(人ドモ)
 シヤチ(ヨシムシロ・タカムシロ) シユル(シル・シタヂ)
 シヨウノナイ(セツナウ)
 シリゾケル(ヒク・ヒキシリゾカス) 知レヌ(ワカラヌ)
 スイバリ(ソゲ) スクイアゲイ(スクヒダセ)
 スゲコミ(ナカゴ・シテ) スゴセ(クラセ)
 スサマシイ(夥シイ・ヨイ)
 スサマシウ(キツフ・多イ・フトウ)

ススメウ(トリモトウ) ススメテ(手向テ・アゲテ)
 スツバリト(サツバリト・シヲラシウ) スバナシ(ウソ)
 スミニ(ウチニ) スユウ(スウ・スエズエトシテ)
 スラリト(ヨロシウ) スルカシコイ(カシコウコサル)
 スワツテ(キテ) スンデ(キヨクシテ)
 セカラシウ(メンドウニ) セチガシカウ(ワルカシコフ)
 セツカ(セメラレ) セリツメテ(セリセリトシテ)
 其元様(アナタ) ソナタ(キミ・コナタ)
 ソノ(コノ・アノ) ソノ身(アレ・己レ)
 ソムイテ(ナナメニ) ソレバカリニ(ソノママ)
 ソレマデニシテ(モハヤ・コレマデデ)
 タガイタガイ(タカヒク) タギツテ(ワイテ)
 ダケ(マデ) タケタ(クレタ) タシカニ(マサニ)
 タスケテ(ソエテ) タダ(ヒトヘニ)
 タタカシヤルナ(ウツナ)
 タダシウ(アリツベシウ・キレイニ) タチ(作り)
 タツシヤナ(壮ンナ) タヅナ(轡ヅラ)
 タズネテ(問テ) タノテ(集テ)
 タバコイレバコ(タバコバコ) タベテ(ハンデ)
 タボウテ(タクハヘテ) タライ(カナタライ)
 タワイナシ(タワケモノ) ダングイ(釘)
 タント(タクサン・ヨケイニ・多) タンモノ(ヨリモノ)
 チイサイ(ホソイ・コマカニ) チカウ(齋シウ)

近ゴロ(コノアイタ・コノゴロ) 直二(スグニ)
 チギツテ(摘テ) チヂンダ(チリチリスル)
 ツイテキ(シタフ・ツイテマワリ) ツイテユク(ヲフ)
 ツカレ(クタビレ) ツクツテ(コシラエテ)
 ツクル(カケル) ツクロウ(ヌウ) ツケ(キツケ)
 ツケ(シラゲヨ) ツケレ(ハレ)
 ツツタツタ(ソビヘタツタ)
 ツネナリマセヌ(アヤシイ・フシギニ)
 ツネノ(ナホザリナ) 常ノ者(カルイ者)
 ツモリ(アタマ)
 ツヨウ(沢山・イカフ・オビタダシウ・キツウ・ヒドク)
 ツラネテ(ツツイテ) ツワ(ツバ・ツバキ) テカケ(妾)
 テカラ(タ後ニ) テギワ(手ツマ) テシゴト(手ツマ)
 デタ(カケタ) テヤリ(手助) トイテ(ヲロシテ)
 トイナヤ(トソノママ) 問ウ(トモロフ)
 トウセ(アナアケイ) トク(カツテ) トグ(ミガク)
 トクト(ヨク・クハシク) ドコ(イツク)
 トシイタ(年ヨリタ・年ヨフナ) 年ガヨラレ(フケテ)
 トツテ(トラヘテ・ニギツテ) トフ(オドル)
 トムライ(祭) トモニ(トナク) トラエテ(取テ)
 トリアゲイ(スクヒダセ) トリツツンダ(トリカコンデ)
 ナヲ(イヨイヨ) ナニガシロニ(ヤスク・ナイガシロニ)
 何シニ(ドウシテ) ナブル(アヤツル) ナマズ(イボ)

習テ(学デ) ナルタケ(ナルベク) ナミウチギワ(ミギワ)
 荷(ニモツ) ニクラシウ(ワルイモノ)
 ニシアナジ(アナジ) ニツキ(ニヨリ) 庭(花)
 ニヨマ(荷ナハ) ニヨリ(ニツキ)
 ニウテ(コシラエテ) ネ(音・コエ)
 ネガイマスル(イノル)
 ネジリカスガイ(手チガヘカスガイ・カスガイ)
 ネゾエ(カモジ) ノガン(アヒル) ノコ(オガ鋸)
 ノチ(アト) ハエコチ(ハエコチカゼ) バカリ(ノミ)
 ハギホウキ(ホホキ) ハコルイ(ヒツ)
 ハザミ(ノゾキ見) ハツキリト(皆)
 バット(ソノママ) ハナシユリ(鼻水)
 ハナセ(ユルセ) ハナノ木(庭木・ハナ) 甚ウ(ヨク)
 ハミイレ(アジカ・カマキ) ハメタ(イレテ)
 ハラタテルコト(怒リ) ヒアガラヌ(カワカヌ)
 秀デテ(ヌキンデテ) ヒキアワセテ(クラベテ)
 ヒキツケ(ヨセテ) ヒクイ(イヤシイ)
 久ウ(トウクニ) ビシヤゴ(ブランコ)
 ヒタト(ヒタスラ) ヒトイキ(シバシ)
 一カタマリ(一ムレ) 一ツレ(一ツガヒ)
 ヒモ(ヒボ・ヒロ・ヲ) ヒヘ(ヒヤウ・サムウ)
 ヒラキ(サキ) ヒロヨリ(シユス)
 ヒロガツテ(ヘダタツテ) ヒロゲテ(ノベテ)

フクロ(フクロウ・ヨタカ) フダ(サゲフダ)
 太イ(ヲヲイナル・アライ) フネ(サケブネ)
 ヘシテ(ノケテ) ホクロ(アザ) 埃(ホコリ・チリ)
 ホセ(カワカセヨ) ホゾ(ヘソ)
 ホソウ(コマカニ・チイソウ) ホドイテ(解テ)
 ホドニ(ニヨリ) ホリヒライテ(サラヘテ)
 マイギリ(キリ) マウ(トブ) マイリマイ(キマイ)
 マコトニ(イカニモ) マダモ(ナホモ) マヅ(姑ク)
 マヘダレ(モツソ) マメノコイロ(トリノコ)
 見合テ(ソヘテ) ミカンツケ(ダイダイツケ・ブンカン)
 水クミカメ(カナヲケ)
 ミトモナイ(ミニクウ・メンドウニ) ミナ(ヨケイニ)
 ミナニナツタラ(尻タラ・ナクナツタラ)
 ミニクウ(ミルニメンドフ) ミヌ(見合ヌ)
 ミヘマセヌ(クラミマス) ミノメ(浮タノ)
 ムガウ(ツヨク) ムシ(蛇) ムシロ(ウシロ・アト)
 ムツカシイ(カタイ) ムマブネ(ハミイレ)
 ムラナウ(均シウ) メデタイ(ヨロコバシイ)
 メンドウニ(ココチガアシウ) モウテ(トンデ)
 モクロミ(ハカリゴト) モシ(或ハ・却テ)
 用イル(ツカイマスル) モットモシウ(ヨイヨフニ)
 尤デ(ヨウ) モトガネ(チガネ)
 求テ(買テ・ツカンデ) モノ(コト・人)

モヨギ(アヲイ) ヤウヤウニ(ハツカニ)
 ヤカマシウ云(サワグ) ヤスマシヤレイ(寝サシヤレヨ)
 ヤツテ(クレテ) ヤトイ者(ヒヨウ)
 山アイノ風(谷アイノ風・ホラカゼ) 山道(ヤマノヘン)
 ヤリ(ツカワシ) ヤレ(クレイ)
 ユエ(ニヨリ・ニツキ) タ(タヘ・クレ)
 ユイヨウ(説クコト) ユイワケ(云ヒライテ)
 ユガミ(カタムキ) ユキドコロ(ユクヘ)
 湯ツケタ飯(ユカケメシ) ユルユルト(ソロソロ)
 ヨイ(エイ・スグレタ・ヨロシイ・尤)
 ヨウナイ(ワルカッタ・ヨロシカラヌ) ヨキ(斧)
 ヨウ(ネンゴロニ) ヨケイニ(オビタダシウ)
 ヨセテ(ツケテ・アテテ) ヨソワシイ(キタナイ)
 ヨノケ(ヒザリテ立テ) ヨロコバシウ(ウレシウ)
 ヨロコンデ(タノシンデ) ワケ(コト・トコロ)
 ワシ(我・ヲレナド) ワタル(ワタス)
 ワルイ(アシイ) ワレ(汝) ワレワレ(ワタクシ)
 フウチ(妻御) フラ(エエ) フライ(タント)
 フラカタ(ホトンド) フラスキ(フミスキ)
 フカヘリ(往カレ)
 フキライナサル(イヤニヲモワシヤル)
 フクレ(テマドリ) フサ(ヒ)
 フサナイ(イトケナイ・コードモ) フソヲ(全タウ)

右の例の中から、多くの語の間で交替が起こっているものをあげると、主として次のようなものがある。

- ヲチヌ(ヌケタ) ヲトシタ(オロシタ)
- ヲビタタシウ(スサマシイ) ヲヘテ(ハエテ)
- ヲボエル(ナラハス) ヲモウ(ムツカシウ)
- ヲモシロウ(ミルニヨウ) ヲヤド(ヂヂ・父)
- ヲリヲリ(ヒタスラ) ヲル(住ム)
- ヲロイタミ(スクノウイタム)
- ・甚・大ニ・沢山・アマリ・イカウ・多・オビタタシウ・キツ
- フ・コトノホカ・スサマシウ・タント・ツヨフ・ヒドウ・
- モットモ・ヨケイニ
- ・イロイロ・アマタ・ヨケイ・スベテ・カズカズ
- ・雑談・タワムレ・ヲドケ
- ・行作・カウセキ・ギヤウ・シワザ
- ・キコヘヌ・フラチナ・アシイ・ニクラシイ
- ・気・気運・気性・キカウ・キシヨク・キブン
- ・敏捷ニ・聡慧・キヤウニ・キリヤウ・ハツメイ・リコフ
- ・奇特・アツバレデ・ケツコウ・コウシヤナ・スグレ・チンチ
- ヤウ・ドウリ・メデタイ・尤ナコト・ヨロコバシウ
- ・必竟・必定・必・極デ・キツト・ゼヒ・ムリヲシニ
- ・仕合・多幸
- ・ツガウスル・尤デ・ヨウ・ドウリデ
- ・歴々・貴人・夫人・守令・年寄・ヤクメヲツトムルヒトタチ

- ・エイ・ヨイ・ヨロシイ
 - ・迷惑・切迫・困デ・キゼキ・ココチガアシウ・セカラシウ・
 - ナンギ・メンドウニ・ムツカシウ
 - ・アワレ・カワイソウ・キノドク・心ヤスイ・シヤウシ・フビン
 - ・ミトモナイ・ミニクイ・メンドウナ
 - ・異怪・奇怪・アヤシイ・ウサン・フシギ・フシン
 - ・無状ナ・アヤシイ・ワルイ
 - ・用心テ・キヲツケテ・ツツシンデ
 - ・糾問・キハメル・ギンミ・サダメル・センギ・タダシテ
 - ・セイダス・ツトムル・ネンゴロニス
 - ・サマザマ・スベテ・ソウジテ・ソウタイ
 - ・ジャウブ・キツウヨフ・タシカニ
 - ・ククツテ・シバツテ・ムスンデ
 - ・シヅカニ・ジツト・ソロリト・ユルリト
 - ・穴アケル・エグル・エル・トホス
 - ・発程・離別・ホツソク・オワカレ
 - ・サバキ・トウリサバキ・処置・処分
- この中から、いくつか取り上げて検討を加えてみたい。

(i) 甚ダ・大ニ・アマリ・イカウ・キツウ

日本語の「アマリ」は、「玉ガアマリウツテ目ガマバユウテ見ラレマセヌ(巻一③16嘆)」「アマリバカラシウ云ナ(巻二⑨82拙)」「アマリカナシウナカシヤレマスルナ(巻四④2悲)」「ナフルコトヲアマリスギヌヤウニシテヤメサシヤレマセイ(巻四⑤20操弄)」のよ

うに、度がすぎていることを批判的な気持ちを含めて表すが、「ホバシラガアマリフトイ（巻一⑧3櫓）」「ミツ入タクワシハアマリマイ（巻四④2蜜菓）」のように単に程度が甚だしいという意味にも用いられている。さらに、他の本では「甚ダ」「コトノ外」となっているものも武藤本では「アマリアツイニヨリモヤモヤスル（巻一②20暑）」「アマリムスニヨリドウモコラエラレマセヌ（巻一②21熾熱）」のように「アマリ」に作る例があり、「アマリ」の使用が多い。

「イカウ」は「ウチガイカウヒロウゴザル（巻一⑨86優）」「ネタニヨリ、イカウラクニゴザル（巻四①3臥）」「コレハイカウメデタイコトジヤ（巻四⑥6是）」のように、程度が高いことを表す。諸本間で「ヒドク」「甚」「キツウ」といった表現と交替があり、「セハ水ガイカウアサウコサル（巻一⑥11灘）」「女房ノ兄弟ガイモトムカウワイカウトリモチマスル（巻一⑪29妻甥）」は「ヒドク（明治）」に、「コノゴロ館中ノ下々ガイカウヲハニミエマスル（巻一⑨89倨慢）」「マワタデキモノコシラヘテキレバ、ヨノキモノヨリイカウアタタカニゴザル（巻三④10縲）」は「キツウ（明治）」に作られている。また、「コノ人ハキツウ勇氣ガコサルサウナ（巻一⑨53勇）」「ツクコトヲキツウシテ米ニ青イ色ガデマシタ（巻三⑪5春）」の「キツウ」は「ヒドク（明治）」に、「ヲトコダテハキツウホウラツニコサル（巻一⑨39曰者）」は「甚ダ（明治）」「イコフ（京大）」に、「コドモガタワイノウアバルコトヲキツウシマスル（巻一⑭21嬰兒）」は「甚（京大）」に、「ヲシロイツケテハナハダウツクシイフリスル（巻三⑤13粉）」「ヒイテユケバ馬モハナハダツカレマスル（巻

三⑭12牽）」の「ハナハダ」は「キツウ（京大）」となっている。こうした中で「イカウ」には、他の「甚ダ」「キツウ」「ヒドク」「コトノ他」とは違って「モットモ」との交替が見られる。「江戸辺ハイカウヲゴリヲスルサウニコサル（巻一⑨73奢侈）」「ハタニスハツテイルヤウスガイカウ女房ヲシウゴザル（巻三④51機）」「ギギトシテイカウタカウコサル（巻四⑫52巍々）」は明治刊本で「最も」となっている。これについては、安田章氏が、朝鮮語の「kacang（最も）」が「イカウ」の意味も包摂する意味内容であることに起因すると説かれている（注9）。

(ii) イロイロ・アマタ・ヨケイ・スベテ・カズカズ

「色々」は、古くはさまざまの色を表していたが室町中頃以降、「さまざま・種々」の意味になり（注10）、本書でも「マンハイロイロノシナデ、アシノヨイモノヲ以テニウイレテコシラエタモチジヤ（巻三⑫12饅）」「チャキンモチハイロイロノモノヲモチデツツム（巻三⑫46包餅）」のように「種々」という意味を表している。「兵器ハイロイロコサル故トクトシリマセヌ（巻一⑨8兵）」は「アマタ（明治）」「ヨケイテ（京大）」に、「リヨウシンドモガイロイロノカリライタシマスル（巻一⑨36獬者）」は「スベテノ（明治）」との交替が見られる。また、「タマハカズカズコサリマスル（巻三②3珠）」の「カズカズ」は明治刊本で「色々」になっている。

(iii) オドケ・タワムレ・タワコト・雑談・雑バナシ

「ヲドケガマコトニナリマシタ（巻四⑤5弄談）」は、「ヲドケガホンニナル（『諺苑』）」「タハレガマコト（『三教重諭』）」のように、

よく行われた諺である。この「ヨドケ」は明治刊本に「雑談」と対訳が付けられているが、「雑談」は、「タワムレカスグレバケンクワニナル（巻四⑤27譏）」の「タワムレ」の対訳としても見える。「タワムレ」には、このような言葉上の冗談の意味と、「シハスノツゴモリハ、イハイモシタワムレヲスルヲヨニヤライト申マサル（巻一③56難）」「ハトハメスヲスタワムレヲヒタトシマサル（巻一⑤27鳩）」のように行動にあらわれたふざけの意味もあり、この場合は明治刊本では「戯弄」と訳されている。

「ザウタンバナシ」は「タダシウシテザウタンバナシヲスルナ（巻四⑥20正齊）」（明治「雑バナシ」）のように話に重点があり、「辞説」の訳語が添えられている。

（iv）聞コエヌ・フラチナ・アシイ・ニクラシイ

「聞コエ」は、武藤本に七例見えるが、そのうち五例は「スズノフトガガラガラシテトラクニキコエマサル（巻三⑩16鈴）」のように音が聞こえるの意味で用いられ、あとの二例は「得心できない」の意味である。そして、「翌年マデナラスト云ニヨリキコヘマセヌ（巻一②11翌年）」は「フラチニゴザル（京大）」に、「アノ人達ガキコヘマセヌ（巻一⑪71彼輩）」は「アシウゴザル（明治）」にというように、他本では得心できない具体的な状態の記述を行う表現になっている。

（v）キドクナ・スグレタ・敏捷ナ・尤ナコトデ・チンチャウニ・奇妙ニ・ケツコウニ・ハツメイナ・聡慧ナ

「キドクナ」は、「ザンジノマニ詩ノ和答ヲシテキドクニゴザル

（巻一③29頃刻）」のように才知煥発なさまを意味し、明治刊本では対訳に「鋭敏」とつけられ、日本語文には「敏捷」になっている。「キヤウニコサル（巻一⑨59敏）」（京大「サトイソウニ」）、「ヘントウヨリコウニスレバカシコイト云（巻四⑤30答）」も明治刊本で「敏捷」になっているものである。才知に限らず「すぐれている」ことを表す例として、「ヒテリテコクモツガ皆カレマシタニ、雨ガフツテ一日ノ間デモ誠ニキドクニコサル（巻一①57早）」（明治「スグレマシタ」）、「人ヨリ秀デテチンチャウニコサル（巻一⑭10秀）」（明治「奇特ニ」）京大「ケツコフニ」「チンチヨフ」とあり、さらに、すぐれていることに対する感心の気持ちを「海ヲセツセツ往来サシヤレテ誠ニキドクニコサル（巻一⑥2海）」（明治「ゴメンドフデ」）京大「ゴクロウニ」、「ヨヨグヤウスヲミルニゲニモキドクニゴザル（巻一⑦15涸）」（京大「キタイニ」）「此人ハケンヤクヲサレテキドクニコサル（巻一⑨74儉朴）」（明治「尤ナコト」）、「孝行ヲシテ父母ニツカエテキドクニコザル（巻四⑧3孝）」のように表現する例もある。

（vi）必竟・必定・必・極テ・キツト・ゼヒ・ムリヲシニ

「サゾ」ハ、中世から近世までは、推量表現と呼応していたが、近世末に呼応しない例も多くなる。武藤本には「サゾ心無ヲボシメシマセウ（巻一③21遅）」「サゾツカレウ（巻四⑨17遠）」の二例の他「サバキヲハヤウスレバサゾカシアラウカ（巻四⑪134處置）」「ヒトリミデゴザツテソザヤナンギデゴザロウ（巻一⑨14孤）」のような「サゾカシ」「サゾヤ」の例も推量表現と呼応している。

「クワンヌキヲタシカニサセ、必定盗人ガイロウ」(巻三①32横木)「ヤクトウデ薬キザンデ、ヒツヂヤウ手ヲキラウ」(巻三⑩29挾刀)「ヒツヂヤウヨイコトガラウ」ニヨリユキテコイ」(巻四⑥5必)「ヒツジヤウケツタンニナルデコサラウ」(巻四⑥24必定)等の「必定」四例もすべて推量表現と呼応し、「チャウジガシラガヨイニヨリ、キハメテヨイコトガコサリマセウ」(巻三⑪18燈花)「コチ風ガ吹クニヨリ、キハメテ船ガマイリマセウ」(巻二⑪22東風)等の「キハメテ」も七例すべて推量表現と呼応する。それに対して、「必ズ」「キツト」等は、「キニチハ、センソト父母ノ死ナレタ日故ニ必トシヤウジンスルヤウニイタシマスル」(巻三①42忌日)「人ハ必ス仁道ヲヲコノウテコソヨイ」(巻二⑨48仁道)「明治「常ニ」「必スコトヲワキマヘテナサレイ」(巻二⑨50察)」「カマエテ必ズシヨシヲツツシムハツジヤ」(巻四⑥1須)」のように推量表現とは呼応しない。

なお、前掲の「サゾカシアラウカ」の例は、明治刊本では「サゾアリガタウゴザリマセウ」となっている。武藤本には他にも「時節ガタテナヲシタラバナニカゴサロウ」(巻一①13時節)「晴タニヨリ一兩日照ツテ重テ雨ガフツタラバ何カゴサロウ」(巻一①15晴)」の例があるが、前者に対する明治刊本に「サゾヨウアリマセウ」となっていることから、これらの「ナニカゴザロウ」は、非常に有り難い、珍しいという意味の反語的表現と解される。つまり、反語によって強い肯定を表すことができるという定式化に基づいてつくられた表現であろう。また、「アリガタウ」の語は、本書では明治刊本の巻二に「安心」の対訳をもつ「ムカヘテアゲテスハラセテモテナ

シナサル故、アリガタウゴザリマス」があり、これは「存在する」とが非常に少ない」という意味から「喜ばしい」という意味に変化したものである。武藤本の「ナニカゴザロウ」のような表現は、「アリガタイ」という語のもつ意味変遷に伴う紛らわしさを避けることにもなっている。

(vii) 仕合せ・多幸

「今年ハ餘ノ事ハセズシテ詞稽古バカリシテ仕合マシタ」(巻一②5年)「クレルマデアソソデ往テ仕合マシタ」(巻一③10暮)「明治「多幸」」「ヲヨロコビナサレテ私モマタシヤワセマスル」(巻四④1喜)」のように、「運が向く」「よいめぐりあわせにあう」といった意味のサ変動詞や、現在と同じように「幸福」「幸運」という意味の「サイワイニ患ヲマヌカレテジツニシヤワセデコサル」(巻四④33僥倖)「マツテ見レバ仕合ガキマスル」(巻四⑪95待)「エンインシタレドモ事ガ成タ故仕合デゴザル」(巻四⑪160遷延)」といった用法がある。明治刊本で「仕合」を「多幸」に作っている例があるが、武藤本でも、「夜間平安デタコウニゴザル」(巻一③33夜間)」といった例がある。「幸福」に比べて「仕合」の方がより口語的であったように、「多幸」の方が改まった言い方である。

「仕合」は、江戸初期頃までは、中立的な語で、「仕合」がよい場合には「其日ハ仕合ノヨイ日デゴザル」(巻一③53其日)」のように「ヨイ」という限定をつけることがよく行われたが、江戸中期以降、「幸運」の意味になり、「クジト云モノハ仕合ヅクデヨウトラウトシテモトラレマセヌ」(巻三⑫12圖)」の「仕合ヅク」のような派

生語も作られた。そして、「仕合」の悪い場合は「不仕合」と表現されるようになる。本書にも、巡り合わせが悪くて生活が思うにまかせないことを「フシヤワセデクラシガトウコサル(巻四⑪147窮屈)」といい、これは明治刊本では「窮シテ」となっている。「サシツカエルコトガアルト云テモソワシイワザヲシヤウカ(巻四⑪141苟且)」(明治「フジユウナ」も同様の意味である。

(viii) ツガウスル・尤デゴザル・ヨウゴザル・ドウリデ

「都合スル」は、明治本で「合当」の訳として見え、その例文は、武藤本では「尤デコサルニヨリサウスルヤウニナサレマセイ(巻四⑥30合当)」となっている。「尤デアル」は、「道理にかなっている」「具合がよい」といった意味で「バツハバツノトリニスルギナレドモ、カルウシテコソ尤デアル(巻三⑩6罰)」(京大「ヨウゴザル」)、「ココロガスグケレバ、スルコトモモットモシウコサル(巻一⑬40心)」(明治「モットモラシウ」、京大「ヨイヨフニ」)のようにいわれ、「ドウリデゴザルニヨリヲセラレトフリニトリヲコナイマセウ(巻四⑤56宜)」は明治本で「モットモデ」と表現されている。従って、「言ガツガウシタ(巻四⑧25槻着)」も「適合する」といった意味に用いられていることがわかる。

(ix) 歴々・貴人・夫人・年寄・守令等

「歴々」は朝鮮の「両班」の訳として「モヲセンハレキレキノ冬道ユクトキカホヲテユキマスル(巻三⑪17毛扇)」(明治「貴人」)、「タツトイレキレキノカウエイジャ(巻四⑨14尊)」と見え、明治刊本では、その他場面に応じて「ヒガサハ外方ノットメヲスル歴々

ガ立テテマワリマスル(巻三③14日傘)」(京大「ヒトタチ」)は「守令等」、「コシニノツテユクレキレキハ、アレハドナタデコサルカ(巻三⑭10駕馬)」(京大「ヒト」)は「夫人」、「ヤクタイモナウレキレキヲカス(巻四⑪148愚濫)」は「年寄」のように具体的に訳されている。

(x) エイ・ヨイ・ヨロシイ

近世には「エイ」ガ口語的、「ヨイ」はあらたまった表現で、一九世紀に入ってから、「エイ」は上方、「ヨイ」「イイ」は関東という方言の相違となった。例えば、『捷解新語』原刊本には一二例の「エイ」があるが全部が「ヨイ」「ヨロシイ」に改められている(注11)。「交隣須知」では武藤本には「ヨイ」とある「仕合ノヨイ日デゴザル(巻一③53其日)」が明治刊本では「エイ」になっている。また、「リンシヤウニヨイ(巻一⑦25米泔水)」が明治刊本で「ヨロシイ」に、「夫ノ兄弟ハ皆ヨロシウスグレタ人デゴザル(巻一⑪48甥)」は「ヨウシテ」になっている。

(xi) 迷惑・ナンギ・キノドク・フビン・メンドウ・ココチガアシ

イ・ムツカシイ・タイギ・セカラシイ

現在「迷惑」は、相手を当惑させるという意味で、「キノドク」は、相手の困惑を見て同情するという意味であるが、もとはどちらも、自分が当惑するという意味であった(注12)。その意味の変化が起こったのは中世末であるが、武藤本の日本語文中の五例はすべて「ミミガトウテメイワクニコサル(巻一⑫23耳)」(明治「キゼキ」)「テリフハ、ノリガ早ウナクナルニヨリ、旅ニキテノリシテクレル

人モナクテメイワクニコザル(卷三④11苧布)」「(明治「ナンギ」)「フセイテキキイレヌニヨリメイワクニコサル(卷四②29拒)」「夏八日モ甚タ暑ク長雨モフツテ迷惑ニコサル(卷一②2夏)」「一坂ヲヲウテ通ニ迷惑ニコザル(卷一④17掩)」のように、自分が当惑、難儀するという意味である。また、見出しとして立てられている「迷惑」は「エ、コレハタワイナシジャ(卷一⑨84迷惑)」(京大「タワケモノ」とあり、日本語の「メイワク」とは異なる。

「キノドク」は、「ワレワレハマコトニブセウデキノドクナ(卷一⑨62懶惰)」「ハザミシテ人ノスルコトヲヒソカニ知ルノハキノドクナカウセキジャ(卷三⑫3窺)」(明治「ヨカラヌ」、京大「シヨフシナ」)のように、自分の当惑についてのものと、「トラエテロウニイレテキノドクニコサル(卷三⑭13拿)」「ケツシヨシテナガサレテドウモキノドクニコサル(卷三⑯20属公)」「(明治「カワイサウ」)「ハナレテタガイニアイエマセイテキノドクニコサル(卷四⑦23離異)」「ムシツノコトテアノヤウニナンギヲシテキノドクニコザル(卷四⑪135曖昧)」(明治「フビンニ」)のように相手に対する同情を表すものがあるが、明治刊本では、それをよりはっきり表す「カワイサウ」「フビン」といった表現になっている。自分の当惑、困惑であることを明確に示す「辻風ガ吹テ目ニコミガ入テナンギニコザル(卷一①35旋風)」「ヤカマシイヤクヲウケタマワツテナンギニコサル(卷四⑪16煩劇)」や「コツブハフカウテ酒ヲアジヲウニメンドウニコザル(卷三⑧14鍾)」「ハシハ湯ツケタ飯スクウテクウニメンドウデコサル(卷三⑧19箸)」といった表現や、さらに具体的に

困難な状況を表現する「カカッテウゴキエマセイテマコトニキゼキシヤ(卷四⑪9拘)」「アリアリトタイメンシテモ、モノヲ云エズキゼキナ(卷四⑫43脈々)」の「キゼキ」や、「クモツテ日ガクロウシテシヤウシニコサル(卷一①20噎)」「ハイシテ庶人トナサレテシヤウシニコサル(卷四⑩22廢)」のような「シヤウシ」という表現も見られる。また明治刊本で「メンドウ」と表現されている所を武藤本では「風邪デハナシユリガシゼントデマシテドウモセカラシウコサル(卷一⑬62涕)」「トクリニ入タ酒ハアマリノ多少ヲシライテセカラシウゴザル(卷三⑧12瓶)」のように「セカラシイ」という方言を用いている例が見られる。

五 音韻

日本語文の清濁については、当時の表記の通例として濁音節に必ず濁点がつけられるわけではないが、清音節に濁点がつけられることはない。従って、清音節であるべき所につけられた濁点は、清濁を音韻上の区別としてもたない朝鮮語の介入による誤りと判断できる(注13)。

1 清音であるべき所に濁点がつけられているもの

トリゴンデ ウマレツギ チリヤクダデ ハギ

マツズグ ユゲ(行)

2 濁音節に濁点がつけられていないもの

カゲホシ カゲホウシ アサムカ(欺) イケトツテ
ウスクロウ イトクルマ エラハヌ ヲトツレテ

3 両形あるもの

ヲホエ カキリ カサリ カセ コホレ シナシナ
 サカタチ シリソケル スサマシイ ススリ
 スルガシコイ チカイ ナカイ ナカレ 何コト
 スイタ スイテ スケ ネカイ ハスシテ ハラタチ
 ハタエ ヒヤサケ ホコロヒタ フカクツ マイト
 マトエ マヌカレ ミカンツケ ミツ モヨキ
 ユキツマル タカタ ヨハレ ヨロコハシウ
 ウツンテ シツンテ ツツンテ ツカンテ

ヲホシメシ・ヲボシ召ス コサリマスル・ゴザリマスル
 コサリマセヌ・ゴザリマセヌ 応シ・応スル・ヲヲジ
 ミシカウ・ミジカウ ヲナシ・同ジ
 ナヒカシロニ・ナイガシロニ 存シマス・存ジマスル
 ソンジマスル・ゾンジマスル カタイ・カダイ
 ハカリ・ハカリ 必ス・必ズ ホド・ホト・ボト・ボド
 トモ・ドモ キツク・キヅク・キツギ マテ・マデ
 コノコロ・コノゴロ 近コロ・チカゴロ
 クタサレマセイ・クダサレマセイ アイタ・アイダ
 コサル・ゴザル・ゴサル・コザル アケ・アゲ
 アシ・アジ ジヤ・シヤ コミ・ゴミ サケ・サゲ
 ドウ・トウ シツカ・シヅカ タシ・ダシ・ダジ
 タツネ・タヅネ タレ・ダレ
 カルカルシウ・カルガルシウ キザンテ・キザンデ

クンテ・クンデ スンテ・スンデ ハツンタ・ハツンダ
 ヤスンテ・ヤスンデ ツツ・ヅツ ツツク・ツヅク
 ナカハナシ・ナガバナシ ハツカシイ・ハヅカシカル
 甚タ・ハナハダ マシワル・マジワル マタ・マダ
 ユカミ・ユガンダ カ・ガ ス・ズ テ・デ
 テモ・デモ トモ・ドモ ハ・バ

濁点がつけられているものの中でも、「アツバレ」「イツバイ」「カ
 ツバ」「コツバイ」「コツプ」「サツバリ」「スツバリ」「年バイ」「バ
 ツチ」「ヒツバク」「モツバラ」等の語は半濁音と考えられ、「ヒカ
 ヒカ」も、半濁音の無表記と推測される。

次の語は母音交替による同語異形と考えられる。

ウチワモノ・ウツハモノ ヲムイ・ヲムウ・ヲモイ
 コクチ・ココチ

また、「ウツトヲル(打)」「カウムリ(被)」「カロイ(軽)」「ク
 ギウチコト(打)」「コマスイテ」「コユミ(暦)」「ツモリ(頭)」「フ
 リマイ(振舞)」「ミソサザヘ」も母音交替の語とみなし得る。

「キミ・キビ(気味)」は、m音とb音のゆれであり、「ムシロ・
 ウシロ(後)」「ムマブネ(馬)」「ムマレツキ・ムマレツギ・ウマレ
 ツキ」は、狭母音の前の鼻音のム表記と考えられる。

s音とt音の交替もあり、「キサナイ・キタナイ」ノ両形が見ら
 れる。

渡り音を頭在化させるか否かの表記のゆれとして、「イウ・イエ
 ハ・イエバ／ユイ・ユイワケ・ユウ・ユエハ・ユヲヲ(言)」「ウチ

ヤケル」「カヤツタ・カユル」「カワユイ・カワユイイ・カワユガル
・カワユラシイ・カワイガツテ」「シヤワセ(合)」「ハイテ(疾風)」「
マイ(繭)」「モヨキ・モヨギ・モエギ」「ヨリヤウテ(合)」があ
る。

ハ行転呼音については、「ハ|ワイテ・ハ|ハク(掃)」の併存に見ら
れるように、発音表記にハ行表記がまじえられている。

「コンボンナ(根本は)」「シヤウセンナ(小船は)」「エンナウ(駕
騫エンオウ)」は、連声現象の例である。また、助詞が前節語の末
音に融合化する「晦日ゴロウ(頃を)」「トウゲフ(峠ヲ)」の例も
ある(注14)。

開音と合音とが一音に帰するのは、京都で元和から明暦頃、東国
で元和頃であるので、当然本書では開合の区別はなされていない。
次に、混乱の状況を、a 字音、b 字音以外に分けて示す。

1 開音を合音で表記する

a 一チヨウ	ヲウゴウ(王后)	ヲウタン(黄丹)
ヲヲヘイ(横柄)	ヲヲドウ(黄道)	ヲヲム(鸚鵡)
カイホウ(介抱)	コウイロ(香色)	コウロ(香爐)
コウコウ(皓々・汨々)	ゴウケツ(豪傑)	
コウサン(降参)	コウシヤ(巧者)	キジヨウナ(気丈)
コウテイ(皇帝)	コウコウ(皇后)	コクヲヲ(国王)
ゴクワトウ(五菓糖)	ソウシュ(錚手)	
ソウレイ(葬礼)	サトウ(砂糖)	サボウ(紗帽)
サンコウ(三綱)	スイソウ(水操)	スイドウ(水道)

ソソウ(粗相) トウガン(唐鷹) トウトウ(滔々)

タコウ(多幸) ホウ(方・法) ボウキヤク(忘却)

ボウクワウ(膀胱) ケボシ(毛帽子) ボウズ(坊主)

ボウタン(冒緞) ホウテウ(庖丁) ボウボウ(茫々)

ホウモンシュ(芳紋酒) ホウラツ(放埒)

ヲウグワ(横臥) トウリツ(倒立) ハトウ(波濤)

ベツゴウ(別号) ヘントウ(返答) モウシャ(夢泄)

モウセン(毛氈)

b アソボウ イタモウ ウボウ ヽカロウ カボウ

タボウ ツカヲウ・ツカヲヲ トヲヨウ ナロウ

ヤシノウ ヤスカロウ ユヲウ・ユヲヲ イタシトウ

ツメトウ ヨカロウ ホウ(這)

2 合音を開音で表記する

a ウンサウ(運送) キカウ(氣候) キヤウ(器用)

コキヨヤウ(故郷) シヤウ(正) シヤウヘイ(松)

シンヤウ(信用) チンチャウ(珍重) キヤウ(興)

b ムガウ

3 両形併存する

a カンヤウ・カンヨウ(肝要) クロウ・クラウ(苦勞)

カウエイ・カウエン・コウクワイ・カウクワイ(後)

ゴチソウ・ゴチサウ(御馳走) ソウ・サウ(相)

ソウタイ・サウタイ(総体) タンナウ・タンノウ(堪能)

ヤウス・ヨウス(様子) リヤウケン・リョウケン(了簡)

【表Ⅱ】武藤本・明治本・京大本の一致不一致をABCで表す

		ABA	ABB	AAB	ABC	AB×	A×B
I	漢	28.0	18.1	7.8	17.1	29.0	0
Ⅲ		24.5	13.1	16.9	21.1	24.5	0
Ⅳ	語	88.1	3.6	1.6	4.2	2.6	0
I	和	21.7	14.3	15.1	22.3	23.5	0
Ⅲ		15.5	13.2	35.8	19.5	13.5	0
Ⅳ	語	78.9	4.9	3.2	8.7	0.5	0
I	音	50.9	7.3	5.5	9.1	27.3	0
Ⅲ		53.2	4.8	4.8	4.8	32.3	0
Ⅳ	便	75.0	13.9	0	2.8	2.8	5.6
I	敬	21.4	10.2	5.6	18.9	41.3	2.6
Ⅲ		18.1	16.0	7.6	26.4	30.6	0
Ⅳ	語	81.5	1.9	1.9	6.5	3.7	0
I	命	21.4	10.2	5.6	18.9	41.3	2.6
Ⅲ		18.1	16.0	7.6	26.4	30.6	1.4
Ⅳ	令	81.5	1.9	1.9	6.5	3.7	4.6
I	活	41.9	3.2	1.6	11.3	40.3	1.6
Ⅲ		37.1	5.7	0.1	22.9	22.9	1.4
Ⅳ	用	90.2	0	0	5.9	0	3.9

b
 アウ・ヲヲ アガラウ・アガロウ アラウ・アロウ
 イカウ・イコウ カヘラウ・カエラウ・カヘロウ・カエロウ
 ヒラウテ・ヒロウテ 死ナウ・シノウ マウ・モウ(舞)
 ユカウ・ユコウ ヲモシラウ・ヲモシロフ・ヲモシロウ
 カタウ・カトウ・カトヲ カタシケナウ・カタシケノウ
 キタナウ・キタノウ スクナウ・スクノウ
 ナウ・ノウ・ナク ハヤウ・ハヨウ・早
 ヤウ・ヨウ・ヨヲ・ヨ ヲヲウ・ヤヲウ ミヤウ・ミヨウ

カウリ・コヲリ サウ・ソヲ ヤウ・ヤフ・ヨウ・ヨフ・ヤ
 サヤウ・サヨウ ヤウス・ヨウス シヤウ・シヨウ・シヨヲ
 ツカイタウ・ツカイトウ 云ワリヤウ・云ヲヲ
 シリヨウ・シレウ・シロウ シヨウ・セウ

推量の助動詞「ウ」が下二段活用動詞について「ススメウ」「ステウ」「タタセウ」「タテウ」「タテラレウ」「ニゲウ」「ノベウ」「マスカリヨウ」「ワリヨウ」等は、「スミョー」「タタシヨー」のように長音化して発音されたものと考えられる。

母音の長短は、上方語では古くから音韻的な存在ではなかったが、武藤本には、「ザンサウ(讒訴)」「ムカウ(媚)」といった短音の長呼や、「早ウ」を「早」、推量・意志を表す「ヤウ」を「ヤ」「ヨ」、「フクロウ(梟)」を「フクロ」というような長音の短呼、「カゲホシ」「カゲボウシ」の併存等の例が見られる。

音便形については、撥音便・促音便・イ音便・ウ音便が見られ、「表Ⅱ」のように、明治刊本が規範的傾向が強く比較的音便形をとらないのに対して、武藤本・京大本は音便形が多くみられる。「イテ(言って・行つて)」「イタ(行つた)」「カエテ(却つて)」「クタ(食つた)」「セツカシヤル(せつつかしやる)」「チト・チヨト(ちよっと)」「ツツク(つつく)」「マガタ(曲がつた)」「モトモ(尤も)」のような特殊音の無表記や、「イスソ・イツソ」「コヲウテ(凍つて)」「マッスグ・マッスグ・マッズグ」のような表記のゆれも見られる。

六 文法

(i) 文末表現

諸本間の顕著な相違として、文末表現があげられる。例文が、言い切りであるか、命令・疑問であるかによって文末表現は異なるが、さらに各々の場合にどのような表現を取るかについて、諸本によって特徴がある。

例えば、「マス」で言い切りの場合の諸本の活用形は次の通りである。

	マスル	マス
武藤本	1 5 6	6
明治刊本	1	1 5 6
京大本	1 0 3	6

武藤本・京大本は、より古く丁寧な「マスル」形をとるのに対して、明治刊本は新しい「マス」形をとる傾向が顕著である。明治刊本で二段活用を保っているもので、武藤本は「晴レル」「クラベル」「ミエル」のように一段化している一方、明治刊本で一段化した形が見える「ヲチル」が「ヲツル」の形になっている箇所もある。

「コソ」を已然形で結ぶ係り結びの法則は、この時代すでに崩壊しているが、「他人ニヲンタクヲホドコシテコソヨケレ」(巻一⑨61 徳)「ヤトイ者ハ、根本ヲ知テツカウテコソヨゴザレ」(巻一⑪42 雇工)のように、他の本では已然形でない所で已然形で結んでいる例もある。浜田敦氏によれば、『交隣須知』に見られる「コソ」の頻用は、日本語の「コソ」よりも広く強調に用いられる朝鮮語の「y

a」を訳したものとされる(注15)。武藤本には、六六例の「コソ」を用いた例文があるが、そのうち二二例が「コソヨイ」「コソヨウゴザル」といった「ヨイ」の強調に関わり、三例が「尤デ」に、その他「コソスジデゴザル」「コソカワユイ」「コソホンノタンモノジャ」「コソアジガアル」「コソリョウケンガアル」「コソスグレタ」のように同類の強調の文脈に用いられている。

武藤本に見られる文末表現を整理すると次のようになる。文末は、表現内容(断定・推量・疑問等)によって規定されるとともに、敬意や丁寧さの度合いによって多様な変化を見せる。

(a) 言い切りの場合

コザル・コサル・ゴサル・ゴザル／コサ
ラ・ゴザラ／コサツタ
コサナサル・ゴザナサル／ゴザマスル
ジャ・シヤ
シヤル・サシヤル

「デアル」の融合形「ジャ」は、江戸語の「ダ」に対して上方語的な表現であるが、「表Ⅲ」のように、明治刊本に「デアル」形を用

【表Ⅲ】敬語の異同(武藤本－他の本)

	申－云	云－申	マスル	×	マスル	×	×	ゴザル	×	×	ナサル	×	×	ナサル	ゴザル/ジャ	ジャ/ゴザル	シャル	×	×	シャル
I	24	4	26	12	35	25	0	4	1	13	12	2								
II	1	7	23	26	13	13	0	0	4	25	2	0								
III	28	12	74	44	53	40	8	1	45	6	31	2								

いている所に、武藤本、京大本は「ジャ」であるものが多い。「カ
ンシヨクハ、二月デモ・・介子推ノ為ニスル日ジャ」(巻一②¹¹¹寒
食)「元日八年トル日デ、酒ヲノミイワイヲスル日ジャ」(巻一②¹¹²
元日)といった文末が明治刊本では、より規範的な「デアル」形
に統一されている。

「マス」の否定表現は、表記上は「マセヌ」の形を取るのが、武
藤本の通例であるが、「キカレマセン」ニヨリ(巻四⑪¹¹⁶)は「ン」
表記になっている。

(b) 推量表現

コサラウ・コサロウ・ゴザロウ

セウ／マセウ・マセフ・マシヨウ・マシヤウ

中世末から近代にかけて推量の助動詞「ウ」が用いられるように
なるが、特に九州では「ラム」の新語形「ラウ」を盛んに用いた。
「タチフリマイガレキレキデアルヤ」常ノ人デナイヤウニミヘマス
ル(巻二⑭³儀)も、この訛形と考えられる。また、「(今ニモ)
シソウデアル」という様態を表すのに「ウ」「ヨウ」を用いる「舟
ニノツテキテヨイマシテ、シノウトイタシマシタ」(巻一⑧¹⁷水疾)
「スツクルアノトリガ、ドウテ子ヲモトウトスルソウニコサル」(巻
一⑮⁵⁰巢)「ヲヲカタコトガデキヨウトシマシタ」(巻四⑥³⁴幾)「マ
サニシソンジヨウトイタシマシタ」(巻四⑥¹⁰将)のような例があ
る。この意味は、動詞連用形に「ソウ」を接続させて「急ナ風ガ吹
テ何デモヲレソウニコサル」(巻一①³⁶急風)「クモガタノテ雨ガフ
リソウニコザル」(巻一①³⁸雲)「ケウハ雨ガフリサウナ」(巻三⑥²⁵

雨装)」という形式を用いるのが現代の言い方である。「ソウ」は体
言・動詞終止形に接続する場合は「江戸辺ハ、イカウヲゴリヲスル
サウニコサル」(巻一⑨⁷³奢侈)「カヲニシワガシヨツテ、年ヨツタ
ソウナ」(巻一⑭⁵皺)のように、確信に基づく推量や様態を表し、
伝聞を表す現代の表現につながっている。

(c) 命令表現

命令表現には、命令形言い切りの他、命令形に「イ」や「ヨ」を
つける方法や、更に次のような敬語成分を付加する方法とがある。

コサレ・ゴサレ・ゴザレ／コサナサレ・ゴザナサレ／コサナレ
マセ・マセイ

シヤレ・シヤレイ／サシヤレ・サシヤレイ・サシレイシヤシヤ
レイ・サツシヤイ

シヤレマセイ・シレマセイ／サツシヤレマセイ

シヤルナ／サシヤルナ／サシヤレマスルナ・サシヤレマスナ

ナサレイ・ナサレマセイ

下サレイ・下サレマセイ

明治刊本では、「命令形＋イ」「マセイ」「シヤレイ」「ナサレイ」
のかわりに「命令形＋ヨ」「マセヨ」「シヤレヨ」「ナサレヨ」を用
いる傾向があり、それを数値で示したのが「表Ⅳ」である。

動詞命令形のみで表現するのは少なく、「アイシラエ」「ウツセ」
「クワセ」「タギラセ」「ダセ」「ナクナセ」「マトエ」「ヤケ」「ヤレ」
「ヨノケ」「ヲケ」「ホセ」「フレ」「招ケ」「ヲコセ」の一五語であ
る。動詞命令形に「イ」をつけたものは多く、次のような語がある。

上イ・合セイ・入イ・イレイ・ウエイ・ウケイ・カエイ・カキ
 タテイ・カゾエイ・カンガエイ・クワセイ・コシラエイ・差ア
 ケイ・サセイ・サラエイ・シカエイ・コイ・スクイアゲイ・ス
 ケイ・ステイ・スエイ・セイ・センジイ・ソエイ・タテイ・ト
 リアケイ・ナサレイ・ノケイ・ノベイ・ハジメイ・ヒロメイ・
 見イ・ミワケイ・ヤスメイ・ユデイ・ワケイ
 「ヨ」形であるのは「カヘサセヨ」「ミヨ」の二語である。

(ii) 敬語

敬意を表すには、「アガル」「ウケタマハル」「ヲヲセツケ」「ヲソ
 レイル」「ヲボシメス」「カタジケナイ」「カタジケノウゴザル」「サ
 シアゲル」「申上ル」のように敬意を含む語を用いる方法と、「申」
 「マスル」「ゴザル」「ナサル」「シャル」といった敬語成分を付加
 する方法とがある。「表Ⅲ」は、敬語成分を有するか否かという観
 点から諸本を比較したものであるが、武藤本は諸本の中でも敬意が
 高く丁寧な表現をとっていることがわかる。次のように、他の本よ
 りも高い敬意の表現がとられている例もある。(一) 内に他の本の
 形を示す。

ゴロウジマセイ(ミラレヨ) イタシマスル(シマス)
 イタシマセウ(シマセウ) アガリマスル(ノマシャル)
 タベマシタ(クフタ) マイリ(ユキ)

また、「ヲ」「ゴ」等の接頭辞、「サマ」のような接尾辞によつて
 も敬意を表している。

「ヲ」は名詞では「ヲウチ(内)」「ヲカタ(方)」「ヲ客」「ヲキ
 ヤクサマ」「ヲギヤウレツ」「ヲサシヅ」「ヲハナシ」「ヲフレ」「ヲ
 ホメ」等に見られ、動詞では「ヲアイナサレテ」「ヲアガリナサレ
 マセイ」「ヲウツシ申テ」「ヲカヘリナサレテ」「ヲキライナサル」「ヲ
 タツネ申マシタ」「ヲコタエナサレマシタ」「ヲサツケナサル」「ヲ
 ステ下サレマセヌ」「ヲスワリナサレテ」「ヲタダシナサレマセイ」
 「ヲタノミ申マスル」「ヲトマリクダサレマセイ」「ヲ疲デゴザリマ
 セウ」「ヲツキ申セ」「ヲツトメナサレマセイ」「ヲトイ下サレテ」「ヲ
 ホメナサル」「ヲメニカカリマシタ」「ヲヤスミナサレテ」「ヲヨロ
 コビナサレテ」「ヲワスレナサレマスルナ」のように見える。「ゴ」
 は、「ゴラン」「ゴクラウ」「ゴモットモ」等に見える。

接尾辞としては、「サマ」は尊敬を表し「天道サマ」「ヲキヤクサ
 マ」のように用いられている。その他、「ガタ」「シユ」「シ」「タチ」
 「ドモ」等も『捷解新語』では敬意による使い分けがなされている
 ことが指摘されている(注16)。武藤本で、これらの接尾辞がどの
 ような語に接続して用いられるかを整理すると、次のようになる。

ガターシンルイ
 シュー子供・ワカイ・女中・トシヨリ
 シー子供
 タチー人・アノ人・トモ
 ドモー(人) アキヒト・アマ・浦人・エビス・キコリ・ギヨフ
 ・百姓・リヨウシ・ワレワレ・ガク人・逆賊・傾
 城・僧・童子・唐人・モノ・子・コドモ・下々

(動物) スズメ

(無生物) 葉・ヲケ

「タチ」「ガタ」は比較的尊敬すべき対象に用いられ、「シュ」「シ」は、それより敬意が低く、「ドモ」は更に低い敬意のものに用いるという区別が見られる。

人稱を表す代名詞も、敬意によって多様に使い分けられている。

一人称ーコチ・ワガ・ワシ・私・私方・ワレワレ・ヲレ

二人称ーアナタ・ゴジブン・コナタ・其元様・ソナタ・ソノ身

・ワレ

三人称ーアノ人・アノ者・アノワラウ・アヤツ・アレ・キヤツ

・コノ人・此人・コノ者・コヤツ・ソノ人・ソノ身・

其身・ソレ・ナニガシ・ヤツ・奴

「ゴジブン」「其元様」はともに「公」の対訳がつけられており、「ゴジブン」ハ、何ノクライヲウケサシヤレマシタカ(巻一⑩22位)」「其元様」ノムスコハ、ハツメイナト申スニヨリヨロコバシウコサル(巻一⑨58慧)のように客観的に尊卑な身分の対象に用いられている。「コナタ」「ソナタ」は「コナタハ、人ノシシユウニトクナツテチンチャウニコサル(巻一⑨25師)」「コナタハチエノヲヲイ人ジヤニヨリヨロソカニナリマシヨウカ(巻一⑨55智)」「ソナタハ、ツヨイ人故必剛毅之心ヲモタシヤレイ(巻一⑨77剛毅)」「ソナタハ、留守ヲシテゴザレ(巻一⑩51君)」のように対者尊敬を表す。また、「ワレ」は、「ワレハサキニタツテユケ(巻一⑪50汝)」「ワレガラヤジト同年ジヤ(巻一⑪68父)」「ヘリガアラバワレマトエ(巻四⑨

34縮)のように親しみや侮蔑を表している。

「アノ人」は「アノ人ハ其身ノ人品ガタンキニシテモンモヲナ人デゴサル(巻一⑨44品)」「アノ人ハ、テヲスル人デタノミニナリマセヌ(巻一⑨51謀)」「アノ人ハドンニコサル(巻一⑨56鈍)」「アノ人ハ目ツキト云ヒイカツガマシイ人ソウニコサル(巻一⑨71汎濫)」のように対象に対して批判的な例文となっているが、「コノ人」は「コノ人ハ、ムマレツキガズントスラリトゴザル(巻一⑨43性)」「コノ人ハ、キツウ勇氣ガコサルサウナ(巻一⑨53勇)」「此人ハ、ケンヤクヲサレテキドクニコサル(巻一⑨74儉朴)」のように対象に好意的である。これは、「コノ」が内のものを指すのに対し、「アノ」が外のものを指すという対象の捉え方の違いに起因するものであつて、「アノ人」と「コノ人」という語自体の敬意の差ではないであろう(注17)。「アレハ、セチカシカウテツカワルヤツデコサリマセヌ(巻一⑨75詐)」の「アレ」の他に、「アレハドナタデコサルカ(巻三⑭10駕馬)」のような敬意に無関係な例があることから「アレ」と「コレ」が敬意の高低に直接関与するものではないことがわかる。「ソレ」が、「ソレハ、ブチヨウホヲニシテドコヘモツカワレヌ者ジヤ(巻一⑨85劣)」とあるのも、人を「ソレ」というように自分たちの物扱いすること自体の結果として侮蔑的な意味になっているものである。「アヤツ」「キヤツ」「コヤツ」は「ヤツ」という成分を有することから、明らかに低い敬意を表して「アヤツガアルクヤウスヲ見ニ、甚ダヲドウソウニゴザル(巻一⑨79悖惡)」「アヤツハ、マエヨリスルカシコイ(巻一⑪65彼漢)」「キヤツガアヤマチヲ

アラタムルト云ニヨリ、イカリヲヤメサシヤレイ(巻一①67厥)「ニアワヌコトヲ云テ、キヤツガキクモノカ(巻四①63不如)」「ヲヲコヤツハコシヌケジャ(巻二①81愚)」のように見える。

(iii) 不定数詞・助数詞

不定数詞として「イク」「ナン」があり、「イクカド」「イク峰」「イクアナ」「イクミズマタ」「イクテ」「イクカゲ」「イクエ」「イクタリ」等さまざまな語について用いられ、「イクツ」「イクラ」「イクバク」「イカホド」のような形で数量に関する疑問を表す。「ナン」は「何尺」「何斗」「何斤」「何里」「何日」のように漢語の助数詞に冠して用いられる。漢語の助数詞には、「一駄」「二軍」「二時」「一度」「二同」「一日」「二年」「一番」「一様」「一ヶ月」「十月」「一斤」「二国」「一寸」「一足」「一束」「一杯」「一疋」「二方」「一本」「一両」「三四両」「一字」「十二穴」「十二絃」「十二色」「数巻」「数遍」のようなものがあり、また和語の助数詞には「一イキ」「十カケ」「ヒトカタマリ」「ヒトカロイ」「一切」「ヒトククリ」「ヒトコフリ」「一坂」「ヒトスクイ」「一ツ」のようなものがあつて、対象とする物によってさまざまな助数詞が使い分けられている。

(iv) 助詞

武藤本が他の本と助詞の用法において異なるものがある。〈武藤本―他の本〉の形で示す。

〈ガーハ〉

ヒキウスガヲムイホドハヤウヲリテユク(巻三①16磨石)

ゴイシガチイソウテコソウチヨウアル(巻三①18碁子)

ツミガヲモイト云テモ命ニカカルコトハコサラヌ(巻三①29罪) 首シメテコロス罪ガ、キル罪ノツギジャ(巻三①31紋) シウシウトシテクルキリギリスノコエガカナシイ(巻四①28啾々)

〈ハーガ〉

コノミズノフカサハイカボトアロウカ(巻一①3河)

コレハフエツタニヨリミヅニツケタカ(巻一①2滋)

アノ水ニウイテユクモノハ何カミワケイ(巻一①21浮)

ババハゴザナサレヌカ(巻一①2祖母)

ヒマゴハアマリヲゼイデカヲヲシリマセヌ(巻一①20曾孫)

アンハチイソウテモシヅカナ(巻三①7菴子)

イテコシラヘタ器ハ、ハヤウワレマセヌ(巻三②27鑄)

ヨルモノハキヌデゴザルカモメンデゴザルカ(巻三④53織)

モヨギノテクリキタノハヲサナイケイセイデゴザル(巻三⑤6緑)

ヨロイカプトヲキテ立タヤウスハマコト二大将ヲシウゴザル

(巻三⑥13冑)

ツケモノハ味ガスユウアル(巻三②9菹)

チンバヒク人ハハシルトキヲカシウコサル(巻四③7蹇)

ヘシテダシテモトガメハナイ(巻四①35除)

「ハ」と「ガ」については、浜田敦氏が、「日本語では、一般的な提言、非限定な事柄をいきなり問題にする文脈では「は」を用いるが、朝鮮語では「ka」でもかまわない」ことから、「河」の例文のような「ガ」の用法が見られると述べられたが(注18)、武藤本の例文では、日本語としてより自然な形になっている。

動作の対象となるものを、対象として提示するか（ヲ）、主題として提示するか（ハ）は、次のように諸本によって異なるがある。

〈ハ―ヲ〉

タマハ、イタ所カシレヌ（卷三⑦26賞）

クダケタモノハ、イツシヨニアツメテヲケ（卷四⑪59碎）

カンヤウナモノハナクスナ（卷四⑪115要）

〈ヲ―ハ〉

ツワヲ必スハイフキニハイテカベニハカシヤルナ（卷二⑬59延）

タテヲ白糸デシテ、ヨコヲモメンデスレバ、ソソナイト申マス

ル（卷三④54経）

フシヒヤウシヲ知ラスシテハ、ウタノアルヲドリヲイタサレヌ

（卷三⑫20曲調）

ウラミラシイワザヲサシヤルナ（卷四③12怨）

ザツナコトヲナラワヌモノデゴザル（卷四⑪2雑）

ヲイモノヲヘシテダサシヤレイ（卷四⑪59多）

同様のことは、次の「ヲ」格を「ガ」としている例についても言える。

〈ガ―ヲ〉

北鷹ノ声ハ、旅ノ思ガマシマスル（卷一④4北）

ダンダンニ軍卒ガトリマハシタニヨリ出テユクミチガコサリ

マセヌ（卷三⑫36層）

乗り物に「乗る」ときは、日本語では「ニ」格を取るのに対して、朝鮮語では「ヲ」格を取るのので、「ビシヤゴヲノル」「馬ヲノル」の

ような形が見えることは既に指摘されているが（注19）、その他にも諸本と次のような異同が見られる。

〈ヲ―ニ〉

ヲットヲ事ルコトハサンコウノ中ニアル（卷一⑪14夫）

シウトヲヤヲ孝行ニットメマスル（卷一⑪24舅）

アキラカナ燈ノ下ニ美人ヲ対シテ居タラハ心ガドウコサラウカ

（卷三⑪19明燈）

ムナガイヲカケレバケワシイ坂ヲノボルトキ、クラガムシロニ

ヲツルクガナイ（卷三⑮20胸帯）

シミシユルヲヒタトノンダニヨリ、酒ヲウチバニヨウタサウニ

コサル（卷三⑫32鼓汁）

〈ニ―ヲ〉

車ノ輪ノメグルヤウニ世上ニマハツテカドダタヌヤウニスルコ

トシヤ（卷三⑭7輪）

賭ニシテマケテ大キニ損イタシマシタ（卷三⑯7賭）

ホソクバニツニ合セイ（卷四⑨5細）

「に於て」という行為の行われる場所や手段を指す「ヲ」「ニ」

の場合は、どちらも用いられ得るが、この場合「デ」を用いること

もある。

〈ニ―デ〉

コシキニモチヲヨウムシテタセバクウニサウヲウナ（卷三⑧8甌）

ツキウスニ米ヲウツテツケ（卷三⑪3臼）

イトクルマニ糸ヲヒケ、キモノニシテキヤウ（卷三⑪24紡車）

シノビガクレハ戦場ニノルゲイデコサル（巻三⑮4鑑裏藏身）
クワセンハ花ヲ餅ニツケテ油ニアゲミツツケテクウ

（巻三⑮44花煎）

〈デーニ〉

カモハトウクモウテ家デカヘバドニミヘマスル（巻一⑮22鴨）
「とともに」の意味の「ニ」「ト」にも異同が見られる。

〈ニート〉

ヘイゼイサケバカリトモニシテ日ヲクラシマスル（巻四⑪155平生）

〈トーニ〉

ウタヲヨクヲウタイナサレテヨコブエトチャウドアイマスル
（巻三⑫23歌）

「ヘ」「ニ」は、古くは「ヘ」は方向、「ニ」は帰着点を指すという区別があったが、次第に「ヘ」が「ニ」の位置を侵すようになる。武藤本に見える次の「ヘ」は、「ニ」の方が規範的である。

〈ヘーニ〉

ソレハブチヨウホヲニシテドコヘモツカワレヌ者シヤ（巻一⑨85劣）

ガク人ドモエゴホウビヲナサレクタサレマセイ（巻三⑫31鼓人）
（v）理由表現

理由を表す表現には、接続助詞「デ」や「バ」による他、「ホドニ」「ニヨリ」「ニツキ」「ユエ」「カラ」等を用いる方法がある。武藤本には「水ガスンダホドニ大ナ魚ガイマセヌ（巻一⑥31清）」「サ

ケガニゴツタホドニトクリヲスヘテヲケ（巻一⑥34濁）」「ヌレタホドニヒナタニホセ（巻一⑦6濕）」「トシイタヲヤジシヤホドニタタカシヤルナ（巻一⑨41翁）」「ミチタホドニマタツイダラバアマラウ（巻四⑨35盈）」の五例の「ホドニ」があるが、これらは明治刊本ではすべて「ニヨリ」に改められている。また、武藤本・明治刊本ともに「ニヨリ」である「アカイヤケガシタニヨリ雨ガフリマセウ（巻一⑤3赤）」「タルニ酒ガイツバイアルニヨリヨアケルマテ吞マセウ（巻三⑧27樽）」「ワダンヲコウニヨリユルシテ軍兵ヲヒカウ（巻三⑫5和親）」の三例は、京大本では「ホドニ」になっている。「ホドニ」は、安田章氏によれば、原刊本『捷解新語』において順接確定を表す中心をなしていた語で、これが改修本では、全確定を表す「ニヨリ」が分化したという（注20）。「ホドニ」の改変について見れば、京大本・武藤本・明治刊本の順に新しい形になっている。また、武藤本は、他の本に比べて「ユエ」を多用している。「キリガカケタユエツシマノ山ガ見ヘマセヌ（巻一①49霧）」「時ガヲクルルユエ早ユカシヤレイ（巻一②12時）」「ウデノ力ガツヨイ故弓イルコトヲナラワシヤレマセイ（巻一⑬10臂）」「トモシビガクライユエカキタテイ（巻三⑪15燈）」等は、明治刊本・京大本ともに「ニヨリ」になっている。その他、武藤本の三五〇の「ユエ」のうち一五例は他の本において「ニヨリ」「ニツキ」「バ」「デ」等の異なる形式が用いられている。

室町時代末期以降、接続助詞として用いられるようになった「カラ」が、「ヲキヤクサマガライデナサレタカラ何ナリトモヨウイセ

イ(巻一⑨18客)」「(明治「ニヨリ」)「イレズミシタカラハ、ドコニ
イテモトガ人ト云ワケガシレル(巻三⑬33黥)」「カウジガヨイカラ
酒ガヨクシユクシタ(巻三⑳26麴)」「(明治刊本で「ニツキ」京大本
で「ヨケレハ」)のように見える。

七 まとめ

「表Ⅱ」は、武藤本が諸本の中でどのような資料的位置づけにな
るかを見るため、漢語・和語・音便・敬語・命令形・活用形等の項
目について、京大本・明治刊本と比較し、一致する度合いを数値で
示したものである。その結果、巻によって一致度が異なり、巻四に
おいては武藤本は京大本に大変近い内容である。また、巻三におい
ては、やや明治刊本と一致する傾向が見られることがわかる。

【注記】

注1 小倉進平『増訂朝鮮語学史』一九六四年 刀江書院

注2 安田章「辞書と文例」(『朝鮮資料と中世国語』一九八〇年 笠間書
院)

注3 拙稿「長崎大学附属図書館経済学部分館武藤文庫所蔵文学語学関係
貴重資料―その2―」(『長崎大学所蔵貴重資料』一九九六年 長崎
大学附属図書館)

注4 福島邦道氏の「新出の隣語大方および交隣須知について」(『国語国
文』三八―一二 一九六九年十二月)によれば、浜田本『隣語大方』
にも同様の記号がつけられているという。

注5 森田武『日葡辞書提要』³²²頁(一九九三年 清文堂)

注6 福島邦道『明治十四年版『交隣須知』本文及び索引』一九九〇年
笠間書院

注7 安田章氏によれば、本書の朝鮮文および見出しは、日本人の手にな
るもので、例文とは必ずしも一致しないという。(注2に同じ)

注8 志部昭平「朝鮮語における漢字語の位置」(『日本語学』一九八六年
二月)

注9 安田章「捷解新語改訂覚書」(『朝鮮資料と中世国語』一九八〇年
笠間書院)

注10 小野正弘「いろいろ」(『語誌Ⅰ』一九八三年 明治書院)

注11 浜田敦「えい・よい・よろしい」(『統朝鮮資料による日本語研究』
一九八三年 臨川書店)

注12 大塚光信「対訳寸感」(『国語国文』五二―一〇 一九八三年十月)

注13 頼原退蔵「近世語研究」(『著作集』十六)

注14 浜田敦「『交隣須知』の言語―二言語の相互干渉」(『交隣須知 本
文・解題・索引』一九六六年 京都大学国語国文学研究室)

注14 土井忠生「近古の国語」(『国語科学講座Ⅴ』)

注14 浜田敦「が」と「は」の一面「主格助詞ka成立の過程」(『朝鮮
資料による日本語研究』一九七〇年 臨川書店)

注15 注13に同じ

注16 安田章「外国資料と中世国語」一九九〇年 三省堂

注17 大野晋「日本語の文法をかんがえる」一九七八年 岩波新書

注18 注13に同じ

注19 注13に同じ

注20 安田章「練度」(『国語国文』六三―一四 一九八四年二月)

(一九九六年十月二十四日受理)